

## 埼玉県に言い伝えられている石（岩石）

本間 久英

地 学 科

(2002年 3 月29日受理)

HONMA, H.: The stones (rocks) handed down by word and mouth in the Saitama Prefecture since old days. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Sect. 4, 54 : 51-92 (2002) ISSN 0371-6813

### Abstract

As one of the teaching materials for the earthscience, especially on the petrological field, traditional stones (rocks) in the Saitama Prefecture, the cradle of Geology in Japan, were carried out the questionnaire survey on the shrines, temples, municipal (town or village) offices and educational committees.

This report is summarized on the questionnaire survey and is consisted of three parts. The first part is mentioned on the natural stones (rocks) handed down by some district in the Saitama Prefecture, the second is on the artificial stones (stone image of Buddha, stone monuments, stone lanterns, guarding lions, graves and so on) and the third is folk stories on stones (rocks).

**Key words:** traditional (legendary) stones (rocks), folk stories, Saitama Prefecture.

*Department of Astronomy and Earth Science, Faculty of Education, Tokyo Gakugei University, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan.*

### 1. はじめに

人類と石（岩石）との関わり合いは、石器時代という大変長い時間を設けていることで理解されるように、深いものであることは周知のことである。しかし、岩片を利用していた時代から、約1万年前くらいから岩石を富や権力の象徴として利用するようになった。その典型的な例は、エジプトのスフィンクスやピラミッド、中国の秦の時代の万里の長城などの巨大石造物が上げられよう。一方、宗教的な石造物も存在する。例えば、雲煌や敦煌あるいはアフガニスタンの巨大石仏像等はある意味では信仰心の強さあるいはその宗教の勢力関係を示しているものと考えられる。そしてそれらの石造物は今日まで脈々として存在し続けているのである。この事は石（岩石）が風化に強く、当時の権力や信仰心などを後世に遺す目的を持って利用されたものと思われる。

振り返って、日本を見渡せば、西欧の石文化に対して日本は木の文化とよく言われているように、大規模な石（岩石）の利用は16世紀の堺港の護岸工事や平城の走りである大阪城の堀や石垣さらには太閤堀と言われる水路等に代表されるように豊臣秀吉の時代になってからである。しかし、人々はその様な大規模な石（岩石）の利用法だけでなく、種々の利用法をしているのである。即ち、神話の時代を含めて、いろいろな時代にいろいろな人々の活動や行動の印として、石仏など宗教的な表現として、一里塚や地藏尊など境界を示すものとし

て、烏帽子岩、ローソク岩など目印として多くの石（岩石）を利用してきた。このようなものは、多くの場合、民俗学的な研究対象となされてきた。そして、柳田国男をはじめとして多くの人々により纏められた本もでていいる。しかし、さらに踏み込んで考えると、歴史のみならず、その時代その土地に生きた人々のものの考え方、経済力、運搬方法、彫刻技術そして地質学（岩石の分布など）等多くの問題として捕らえることが出来るのである。

本報告は上述のように利用され、言い伝えられてきた石（岩石）に注目して調査・研究をし、総合的な理解をしていくための第一歩としたい。今回は、実地踏査を行っておらず、アンケート調査の結果のまとめとして報告する。

## 2. 調査地域と調査方法

本調査は全国で行えれば望ましいが、今回はその第一歩として、日本の地質学発祥の地とされる埼玉県に注目して、言い伝えのある石（岩石）を探すことにした。

調査に当たっては、広範囲に言い伝えられているものや極めて狭い範囲での言い伝えなどがあると思われる。言い伝えが何れにしてもその土地その土地に根ざしていることを考えれば、その土地に根ざし、古くから存在するものと言えは神社や寺院であろう。そこで、神社は「全国神社名鑑」に掲載されている全てに、又、寺院は「全国寺院名鑑」より各市町村における1宗派1寺院を任意に選ばせてもらい、連絡を取った。又、後日、神社、寺院の一部の方よりの助言で、各市町村の役所にも連絡を取らせてもらった。

そして、文書で連絡のあった協力者は下記に示すとおりである。ここに改めて多くの皆様方のご協力に感謝する次第である。

### 協力者名

- |               |         |          |         |
|---------------|---------|----------|---------|
| 1. 朝霞市教育委員会   |         |          |         |
| 2. 岩槻市        | 久伊豆神社   |          |         |
| 3. 浦和市役所      | 大泉院*    |          |         |
| 4. 大宮市        | 普門院     | 埼玉県護国神社* | 慈眼寺*    |
| 5. 桶川市役所      | 明星院     |          |         |
| 6. 春日部市       | 圓福寺     |          |         |
| 7. 加須市役所      | 宝幢寺*    |          |         |
| 8. 川口市役所      | 川口神社*   | 慈星院*     |         |
| 9. 川越市博物館     | 喜多院     | 氷川神社     | 古尾谷八幡神社 |
| 10. 北本市       | 多聞寺*    |          |         |
| 11. 久喜市教育委員会  |         |          |         |
| 12. 熊谷市教育委員会  | 高城神社    | 東竹院      |         |
| 13. 鴻巣市教育委員会  |         |          |         |
| 14. 越谷市       | 清浄院     | 久伊豆神社    |         |
| 15. 坂戸市教育委員会  | 大宮住吉神社* |          |         |
| 16. 狭山市役所     | 天岑寺     |          |         |
| 17. 草加市役所     |         |          |         |
| 18. 秩父市教育委員会  | 秩父神社    |          |         |
| 19. 鶴ヶ島市役所    |         |          |         |
| 20. 所沢市教育委員会  | 大福寺     |          |         |
| 21. 戸田市役所     | 常福寺*    |          |         |
| 22. 蓮田市教育委員会  |         |          |         |
| 23. 鳩ヶ谷市教育委員会 | 氷川神社    |          |         |

24. 羽生市教育委員会		
25. 飯能市教育委員会	天龍寺	
26. 東松山市教育委員会		
27. 日高市役所	瀧泉寺	霊巖寺
28. 深谷市役所	楡山神社	
29. 本庄市教育委員会		
30. 八潮市役所		
31. 与野市役所		
32. 和光市役所		
33. 蕨市	和楽備神社	
34. 入間郡大井町教育委員会		
35. 越生町		
36. 毛呂山町歴史民俗資料館		
37. 大里村教育委員会		
38. 大里郡岡部町教育委員会		
39. 江南町役場		
40. 花園町教育委員会		
41. 寄居町教育委員会		
42. 川本町	応正寺*	
43. 北足立郡吹上町教育委員会		
44. 北埼玉郡北川辺町教育委員会		
45. 騎西町	玉敷神社*	
46. 児玉郡上里町	菅原神社*	
47. 神川町教育委員会		
48. 児玉町役場		
49. 美里町役場		
50. 秩父郡大滝村教育委員会	三峯神社	太陽寺*
51. 小鹿野町	小鹿神社	
52. 長瀨町教育委員会	宝登山神社	
53. 皆野町教育委員会		
54. 比企郡小川町教育委員会	長福寺	
55. 玉川町教育委員会		
56. 都幾川村教育委員会	慈光寺	
57. 嵐山町教育委員会	鬼鎮神社*	
58. 南埼玉郡白岡町教育委員会		
59. 菖蒲町	長龍寺*	

\*は、伝説石は無いと答えた所。

埼玉県を例にして、アンケートの結果を纏めてみる。纏め方としてはそのまま記載することも考えたが、ここでは、Ⅰ部に自然の石（岩石）について言い伝えられているもの、Ⅱ部に石（岩石）を加工したもの、Ⅲ部に石に関係あると思われるものを含んだ民話の順で述べたいと思う。順番は謝辞の項の順に従い、市、郡（町村）の順でのアイウエオ順にした。記載は基本的にはその市町村内で存在するか、時として周辺部を含む場合もある。なお、調査はさいたま市誕生前であったので、当時の地名を用いている。

# Ⅰ部 いわゆる言い伝えのある自然石等

## 1. 朝霞市教育委員会

○疱瘡石——岡地区の東門寺境内にある。疱瘡にかかった者は、枕元にこの石を置くと治ったという。あばた石である。なぜと天然痘が治るともいう。(すでに半世紀程も前に、この伝承は失われているようだ)

○おしゃくじ様——岡地区の広沢山本仙寺および浜崎地区の地藏堂にある。石棒が祭っており、土地の人は「石神(しゃくじ)様」と呼んでいる。おしゃくり様とも言う。本仙寺のものは、百日咳、疱瘡の神様である。そばにある人の踏まない石を拾い巾着袋に入れてくちなしの枝に結わえて腰に下げた。そうすると病気にかかり難く、かかっても軽く済むといわれた。はやりが終わると小石を倍にして返した。浜崎のおしゃくり様は子供が浜に持ち出しても、次の朝にはきちんと元の所に納まっていたといわれている。(以上、「朝霞市史 民俗編」より)

## 2. 岩槻市、久伊豆神社

○力石——一般的には、力試しに用いた石を奉納したもの。市内の各神社に存在するものと思われる。

## 3. 浦和市役所

平野部ゆえ、特に伝えられている石はない。

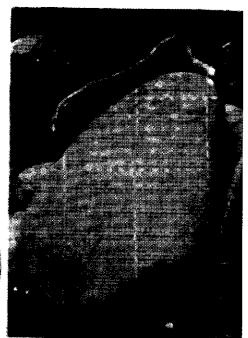
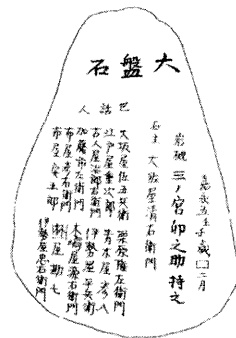
## 4. 大宮市、普門院

○小栗上野之介首塚の石——慶応4年4月、小栗上野之介忠順(ただまさ)は、烏川河畔にて首を斬られ、武笠銀之介なる小姓が夜闇に紛れてさらし首を持ち帰り、普門院にある先祖代々の墓地内に埋葬した。しかし、名を刻むことあたわず丸い石のみを置いて供養したと言い伝えられる。御影石(花崗岩)で高さ約2mのもの。

○白山妙理大権現——普門院の小さな小屋建の中にある自然石で、何か人の形をした石である。客殿の厨子の中に安置してある。15cmほどの小さい石である。ある時、心ない者が持ち帰り、自宅に置いておいたらしいが、5年くらい経った後、又、元に戻っていたと言う。

## 5. 桶川市役所および明星院

○力石——市内の殆どの神社には力石と言われる石が2つや3つは見られる。大きさは様々である。江戸時代から明治初年までのものが見られる。稲荷神社には嘉永5年の大磐石と刻まれた力石がある。農閑期の夜などに若い男達が力比べをしたという。〔「桶川市史」による〕⇒ ⇒ ⇒



## 6. 春日部市

平野部ゆえ、伝説石はない。

## 7. 加須市 宝幢寺

利根川右岸に位置し、沖積地のため、岩石等は極めて少ない。そのため、伝説的なものは無い。

## 8. 川口市役所および川口神社、慈星院

民話はあるが、伝説の石は無い。

## 9. 川越市立博物館および氷川神社、古尾谷八幡神社、喜多院

○さざれ石——三芳野神社の社宝の中に、松平信綱寄進と伝えられる宝物がある。これは、島原の乱(1638)



鎮圧のため当地に赴いた際に持ち帰ったものと伝えられる中のものである。これは「薩摩石」,「簾石」のいずれに該当するかは不明である。ものは珊瑚である。

○かぼちゃ石——同上, 社宝の一つ。「簾石」を指しているのであろう。珊瑚の一種と思われる。

○力石——昔, 地元の若者が成人儀礼として力石を持ち上げたという。長径40~50cm で複数存在する。氷川神社では, 現在は植え込みの緑石として並べられており, 気づく人もいない。

日枝神社, 古谷神社（旧赤城神社）などにもある。

○しわぶき婆の石——広済寺（しやぶきばばの塔）にあり, 風邪を引いた子の親がこの石に祈願をした。“しわぶき”は咳のこと。

#### 11. 久喜市教育委員会

特に言い伝えられている石は無い。

#### 12. 熊谷市教育委員会および東竹院, 高城神社

○達磨石——江戸初期, 忍城主阿部豊後守の命により, 石を秩父山中から筏にて荒川を運搬中, 久下地区にて落下してしまった。その後, その石が河中を2 km ほど遡って大正14年東竹院前の川原にて発見された。石が故郷へ帰りたくて遡ったのだと伝えられている。当時の青年団と住職が協力して現在位置（東竹院境内）に安置した。高さ3 m, 重さ15トン, 中央に自然に出来た半球状の穴が空いている。横から見た形が達磨大師の座禅姿に似ている。また, 巨石を秩父より城中へ運ぶため筏で運搬してきた所, 河中に転落, その後もこの巨石を惜しんで何度か発掘しようとしたが, 失敗し, 度々の洪水によって埋没してしまったともいわれる。 ⇨ ⇨



○赤石——赤ちゃんの御食初めのときに使う。大きさは大中小様々である。高城神社の社にある。

○頼朝の腰掛け石——市内の万吉にあるが, 歴史的根拠はない。寺院の礎石であろうと言う。

#### 13. 鴻巣市教育委員会

○力石——説明は省く。愛宕神社に6基（最大42貫）, 生出塚神社に5基, 氷川神社に5基, 上谷氷川神社に2基が知られている。大きさや文字等が明確である。

#### 14. 越谷市 久伊豆神社

○力石——江戸時代に町の力持ちがその力を示すものとして用いた。奉納された力石は2個（50貫目と20貫余）であるが, 以前はもっとあったのではないと思われる。

#### 15. 坂戸市教育委員会

○機神様（はたがみさま）——善能寺の五叉路にたつ自然石。昔, 善能寺にお雪と言う娘がおり, 機織り上手として知られ, 若い衆からの結婚の申し込みも多かったが, お雪は機織りに熱心でそれらの縁談を断り続け, さらにもっと機織りが上達しますようにと, 塚原という人里離れた淋しい所にある機神様に夜になってこっそりお詣りに行った。ところがお雪に縁談を断られた男の一人がお雪を殺そうと付け狙い, たまたま淋しい塚原の機神様に詣るお雪の後を付け, 押んでいるお雪の後ろから刀を振り上げて切りつけた。刀は機神様の石に当たり, 縦に割れるとともに刃がぼろぼろに欠けてしまった。その後, お雪の夢枕に機神様が現れて, いまの塚原の所は人通りもない淋しいところなので, もっと人通りの多い所に出してくれたなら, 村中の女達の機織りが上手になるようにしてやると言われた。お雪はさっそくこの事を家人や村人に話し, その結果現在のように村の中央の五叉路の賑やかな所に移し, それから村人の機神様へのお詣りは増え, お雪もやがて結婚し, 幸福な暮らしをして世を終えた。機神様の縦の溝はそのときの刀傷の跡であるという。（「坂戸市史 民俗資料編Ⅱ 石造遺物」(昭和58年)より）

## 16. 狭山市役所および天岑寺

○乳の出る石——青柳地区の釈迦堂の周りをよく見ると、一字一字経文を書いた小石があるが、乳が出なくて困っている産婦がこれを頂いて帰ると、乳が出るようになると言われている。

○川原の穴あき石を地藏等に上げる風習はしばらく前にあったが、いまは廃れている。(天岑寺)

## 17. 草加市役所

○力石——高砂地区八幡神社、住吉地区宅地内、神明地区神明神社2基、吉町地区日枝神社2基、氷川町地区草加神社4基、西町地区神明神社4基、草加地区観音堂2基、瀬崎町地区浅間神社3基、谷塚町地区稲荷神社5基、谷塚上町地区神明神社、両新田東町地区稲荷神社、八幡町地区町内2基、弁天町地区観正院、同巖島神社、旭町地区薬師堂3基、同天神社2基、金明町地区旭神社7基、長栄町地区天神社3基、新栄町地区稲荷神社4基、清門町地区稲荷神社5基、青柳町地区薬王寺跡、柿木町地区東漸院、稲荷町地区明学院5基、同慈尊院、花栗町地区稲荷神社5基、北谷町地区稲荷神社4基

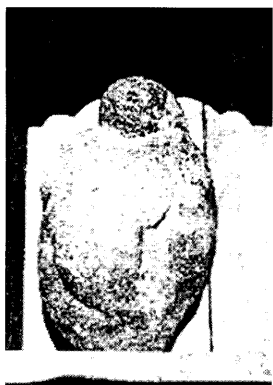
## 18. 秩父市教育委員会および秩父神社

○神降石（俗称赤石）——秩父の礫岩層から産出する礫石の一種。湿度が高いときには水滴をつけて紅色を呈する。「生き石」と称する人もいる。「神降石」とは神様がお降りになる「依り坐し」の意味であるが、いつから存在しているのか確かなことは不明である。伝承に依れば、この石を運搬する際、あまりに巨大で重いため、難儀をしたが、婦人の髪で縛（な）った綱で牽引したところ、漸く運び入れることが出来たという。赤子の夜泣きにご利益があるとされ、願を掛ける氏子もいる。この石は秩父神社境内にあり、高さ約150cm、周囲約450cmである。(神社より)

○爺婆石（じいばあいし）——武甲山麓に爺さん婆さんの寝ている姿の岩がある。人々はこれをジジイババア石と呼んでいる。昔、ある爺さんと婆さんが住んでいた。この二人は働きはするが、強欲な上、拗（ねじ）け者とあって、村では変わり者とされていた。ある日、田の草取りをしていたが、暑さの中、腰を下ろしているうちにいつの間にか寝込んでしまった。目を覚ましたときは、太陽はもう西に沈もうとしていたので、お日さんがもう少し出ていてくれと言うと、太陽は又出てきて輝いたが、二人は石になってしまったという。横瀬町横瀬根小屋耕地（根古谷）にあり、高さ約30cm、周囲約1mである。(神社より) ⇨



○子持石——秩父札所第三番岩本山常泉寺に伝わるものである。昔、この土地に仲の良い夫婦がいた。何一つ不足はなく毎日を暮らしておりました。しかしこうした楽しい生活の中にもただ一つの不満は夫婦の間に子供がなかったことです。親子が仲良くしているのが羨ましく思え、「何とかして子供が欲しい」と二人は口癖のように言っていました。ある夜のこと、二人の夢枕に不思議にも一人の観音様が現れ、常泉寺の「子持ち石」を信心すれば立派な子供が産まれるだろうと教えられました。翌朝二人はこの夢を信じ、それから毎朝、毎晩この子持ち石を拝し、早く子供が産まれるように祈りました。こうする中にまもなく身ごもり、やがて健やかな男の子が産まれました。夫婦はそのお礼にと袈裟を納めました。この話が伝わり、参詣者が絶えず、子を授かった人々は前掛けや袈裟を納める習いになりました。子供の寝ている姿をしたこの「子持ち石」に参詣者はいまでも絶えないと言う。⇨



○鬢盥（ビンダレ）の石——荒川の波久礼橋の下に高さ3丈の巨体を横たえている。秩父の庄司畠山次郎重忠が、ある日石田牧（野上町岩田にあった）の見回りに来て、波久礼の景勝を探ったとき、鬢が解（ほつ）れたので、それを直すために辺りを見回すと、丁度すぐ側の石の中に水が光っていました。重忠は早速岩にかけ登り水を鬢につけて櫛付けしました。その遺跡がビンダレの石の伝説です。又この石には別に「雨乞いの石」

とも名が付けられている。

○葉師岩——野上町矢那瀬にある。これは畠山重忠が馬に乗ってこの岩を渡ったときつけたものと言われていた。そして現在も歴然と蹄の跡が残されている。

○橋立鍾乳洞——橋立溪流に「霧の海」と言う底知れない淵がありました。そこには悪龍が棲んでいて付近の家々の牛や馬を獲り、食っていたという。村人達は困り果て、一体誰の手技なのかを確かめることにしました。奪い取られるのは夜のことで不寝番を立てることになりました。ある晴れ渡った夜のこと、怪物のようなど全くありません。そのため、不寝番の人はつい眠気を催し、うとうとしました。どのくらいの時間が経ったでしょうか、ふと風の音に目を覚ますと、晴れ渡った空は黒雲に閉ざされ、風が渦を巻いて激しく吹いています。不寝番はあまりにも急激な変わり方に目を疑いました。ただ、茫然と見ているだけでした。風はいっそう激しくなり、黒雲は不気味にもさらに低くたれてくるのではないかと感じました。しかし、隠れてしまっただけだと考え、勇気を振り絞って目を凝らして見ていました。すると、黒雲は馬小屋めがけて、恐ろしい速さで飛んできます。馬小屋が一瞬雲に包まれたかと思うと、馬の悲鳴が聞こえました。見ると馬小屋は倒れたかいは桶のみで、馬の姿はありませんでした。僅かな時間の出来事の後には再び、静かな冴え渡った空に戻っていました。不寝番はこの出来事を村人に伝えました。村人達は雲を呼ぶことからあの霧の海に棲む龍ではないかと話し合いました。村人達は早速、橋立の観音様に悪龍退散の祈願を始めました。ある日、この祈願に答えてか、観音堂より一匹の白い馬が飛び出し、霧の海に向かって行くではありませんか。そして、馬が停まると同時に、悪龍が雲を起こして姿を現し、白馬を一呑みにしようと追いかけてきました。白馬は観音の奥の院の岩屋に逃げ込みました。すかさず悪龍も後を追って岩屋に飛び込んでいきました。村人達は固唾を呑みながら見守っていました。しかし、その後、何の音も聞こえず不気味な静けさが漂っていました。やがて、一人の人が、あの白い馬は観音様の化身なのだ。有り難いことだ。あの憎い悪龍め、お怒りに触れてとうとう石にされてしまったのだと叫びました。村人達は頷きました。穴の中には今も「昇り龍」や「下り龍」という不思議な形をしたところが残っています。石灰岩です。

○虚空蔵岩——秩父郡荒川村日野に伝わる話です。怠け者の樵夫（きこり）四郎はいつもぶらぶらして、人々が働いているときも遊んでばかりいました。ある日、四郎は珍しく薪を取ってくると言っただけで山に出かけていったまま帰ってきませんでした。近所の人たちは四方八方探しましたが分かりませんでした。ところが、四郎は翌日ひょっこり帰ってきました。人々は彼にどうしたのだと尋ねると、四郎は「山で神様に遭い、弟富士の頂上にある虚空蔵岩を引き下ろすのに手伝わされて、骨を折ってしまったりと帰ってきたところです」と答えました。こうして、神様に手伝わせられた怠け者の樵夫は、その後すこぶるまじめになったということです。そして、このとき引いた縄の跡だと言われる条痕が、虚空蔵岩には今もはっきり残されています。秩父郡東秩父村にもこれとよく似た「神隠し」伝説があります。

○法悦の石——ある日、大霧山から流れ出す三沢川のせせらぎに沿って、山道を一人の男が大きな石を担いで、然もさも軽そうに歩いてきました。その石は長さ5尺くらいの長方形の「油石」で、厚さが1尺5寸、幅1尺くらいの一見して150、60貫はあろうかと思われる見事な石で、靴脱ぎ石や台石にでもするには最も相応しいものでありました。しかし、それにもまして見事なのは、少なくとも大人4、5人かからなければ持ち運ぶことの出来ないこの大石を汗一つかかないで軽々と肩にした男の力にあります。身仕度はと見れば、秩父編の地味な単衣にぐるぐる巻きに結んだ帯、白木綿の股引の下に手製の草履を突っかけ、腰のあたりに多少趣向を凝らした皮の煙草入れのみがことごとく鳴っているだけで、一見したところ農の暇に、ぶらりと足の向くままに遊びに出かけたと言った様子でした。行き交う人も足を留めて驚きの目を見張り、このこと後をつけてきて、この男を不思議そうに眺めていました。あちこちから人が集まり、口々に何かをささやきながら野次馬の数が増えていきました。この有り様を小高い寺の石垣の上で、小手をかざして眺めていたのは、常楽寺の和尚でありました。識徳円満で高潔をもって聞こえる和尚は、また気持ちの明るいのびやかな人でもありました。和尚は、すぐにその神通力を持った男が、荒川村の上田野と言うところの即道坊であることを知ると、そのまま紫の袈裟を翻して坂をかけ下って群集の中へ割り込みました。そして早口で大声で「おい御坊、今、上田野が火事だと言う知らせが届いたぞ。早く行ってみた方がよいぞ」と叫びました。即道坊は愕然としました。和尚の温顔に会釈をする暇ももどかしく、肩にした石を忙しく投げ捨てると「それは大変だ、和尚それでは御免」というが早いか疾風のごとく走り去ってしまいました。その速さは羽団扇を持った天狗と思われるほどで

した。野次馬の中からだれ言うともなく「あれは天狗だ」「あれは神通力だ」等というつぶやきがありました。「これこれ皆のものそう驚かないで、この石を寺まで運んでくれぬか」と和尚は平然と言いました。呆気にとられていた野次馬達もおおらかな和尚の笑顔を見ると急に人心地を取り戻しました。あの男は誰であるかを訪ねました。「うむあれか？あれは上田野住まいの即道と言う御仁じゃ。別に天狗でもなければ妖怪でもない。ただの人間じゃよ。ささ、この石を運んでくれ」とその「油石」をなでながら、「さすがに良い石じゃ即道に所望すれば決して呉れぬとはいわんが、如何に神力を持ったとはいえ未熟者だなあ、火事等と嘘を言って驚かしてみるのも後々のためじゃ。良い功德をいたわい」と独り言をつぶやきました。野次馬達はとうとう笑い出してしまいました。「面白い和尚さんだな」などと言いながら屈強な若者が代わる代わるその大石に手を掛けましたが、びくともしませんでした。二人、四人掛かりでも思うようにいきません。「えい、意気地なし。誰か天秤棒と縄を」と和尚が言いました。こうして天秤の力で、漸く四人の肩に支えられて常楽寺の石段の下に運ばれました。そしてこの石は善男善女の法悦（神仏の救いを体感したときの喜びであって、和尚さんのお話を聞き、神や仏の有り難い御心を得ること）への踏み台となっています。

(以上「秩父の伝説と方言」, 昭和37年より)

#### 19. 鶴ヶ島市役所

平野部ゆえ、伝説石はない。

#### 20. 所沢市 大福寺（薬王寺よりの依頼）

○お唐石様——赤味がかった石のこと。森田家に2つある（平成12年10月確認）。民話の項を参照のこと。

#### 21. 戸田市役所

○力石——氷川神社に10基ある。美女木地区の八幡社のものは「亀齡石」と称されている。

#### 22. 蓮田市教育委員会

○お寅子石——民話の項を参照のこと。

#### 23. 鳩ヶ谷市教育委員会及び氷川神社

○力石——成人のおりの力試しに用いた。市内に9基ある。三つ和氷川神社2基の他、十二所神社2基、笠間稲荷神社、八幡社、神明社、本町三丁目自治会、中央公民館。（「鳩ヶ谷市の文化財 第三集 金石文」昭和52年より）

#### 24. 羽生市教育委員会

○甲石——避来矢神社境内にある石である。以前は飛来石神社と呼称したようで、この名称の由来となった石である。即ち、下野の国栃木村依り飛来せし大石を里人「甲（かぶと）石」と称して崇敬し天文年中日本武尊を遭わせ奉祀したるものと伝えられる。利根川の引堤工事に当たり、新田の移転に伴い地中に埋没していた伝説のご神体「甲石」を初めて掘り出し、氏子一同の奉仕により昭和35年3月30日現地に還座す。（「羽生市史、上巻」1971より）

#### 25. 飯能市教育委員会および（子の権現）天龍寺

○龍鱗石——天龍寺第一の什宝。円石で径6分程。その色瑠璃の如し。子聖初めて登山の時、野火の患にかかりしが、端座合掌して火抗変成池と念ぜしとき、天龍忽ち法雨を降らして、猛火速やかに消せりとぞ、乃時天龍一つの鱗を遺せしが、変じて石と化せりとて……（「新編武蔵風土記稿」より）——ビー玉位の大きさで、黒に近い紫色を呈す。ここ50年で1、2回しか公開していない。

○来迎岩（来向岩）——別に「経掛石」とも言う。子聖月山の峯より投げし般若經の留まりし岩にて、即ち茲に来住せし古蹟なり（「新編武蔵風土記稿」より）。高さ2m弱の山形の岩である。子の権現境内にある。

○座禅石——子の聖がその岩上で修行したと言われている。高さ5m位で上部は平らで6畳位の広さがある。

る。子の権現山内にある。

○天狗岩——ある時、ある家で嫁に行くときの一反絹の反物が盗まれてしまった。そこで長沢の痩せこけた天狗使いに願掛けしてもらったところ、ある方角の者が盗んだらしいとでてしまった。そこで、要津の大男の仙三郎さんが怒って、天狗使いをぶってしまったと言う。「このままじゃすまないぞ」と捨てぜりふをはいて天狗使いは帰ったが、その後は赤い衣を纏った天狗がこの山帰りにはよく出没して人々を驚かせたという。その天狗の住みかが「天狗岩」である。入間郡名栗村上名栗子の権現山内にある（「会報 奥武蔵247」より）。

天狗化成石 從來堙拵多 儒先曾未悦 釈典或弥魔  
火尼暫時戯 兵難平地波 有聞無有見 真偽兩如何

（宝永6年 子の権現記事より）

○天狗岩——上大栗の西南、間に下大栗がある。岩があり松が生えた寂しい場所である。飯能市中藤上郷天狗岩にある。（「飯能市史 地名編」より）

○へび岩（ヒビ岩、飛び岩）——ヒビが岩に入っているからヒビ岩とも、大蛇がいたとも言われている。大岩が境の沢のこの山参道沿いにある。名栗村上名栗の子の権現山内にある。

山路榮紆曲似蛇 登臨憩處夕陽斜 何人來此学仙術 飛石岩頭食茗霞（宝永6年子の権現記事より）

○鏡岩——上中沢の北の山中に鏡の如き光沢のある岩があるという。（「飯能市史、地名編」より）

……ここからひと登りで、見上げると10m程の高さの鏡岩にでる。急斜面にある岩峯なので、背後に回ると4m程になってしまう。岩壁は2、3ヶ所断層鏡肌になり、光っている。（「会報 奥武蔵209」より）飯能市南にある。

○馬乗岩——小瀬戸の釣り橋の下にある。高さ2間、幅9尺許。その由来を知らず。此辺巨岩奇石多けれど、唯其名あるのみを載す。（「新編武蔵風土記稿」より）「ものがたり奥武蔵」に“重忠が馬に乗るのに使った”と記述してある「馬乗岩（石）」が枳屋谷の外れにあるとのこと、まず、その岩を探して歩く。沢伝いの道をどんどん乗っていくと、最後の空き家があり、心細い道に変わる地点にそれはあった。見かけは小さいが、高さ2～3mに横幅4mもある舟形の「馬乗岩」である。（「会報、奥武蔵209」より）

○申岩——地元の人の話では、申岩という屋号の家があり、その家の庭にある岩は、昔、猿がよく出てきたところであるから、その名が付いたという。飯能市南川上久通にあり、今は個人所有の別荘になっている。

○鏡石——ぎ峠に出る山道に「鏡石」と言う表面のびかびかと輝く岩がある。飯能市北川石風呂にある。

○幕岩——朝見山の西、幕を張ったような断崖がある。飯能市赤沢幕岩や同井上幕岩にある（「飯能市史」より）。

○清水岩——茶内の西、朝見山の麓、岩の元に清水が湧出する。飯能市赤沢清水岩にある。

○白岩——中の北、入間川に白っぽい石がある。土地の人はこの石が地名になったのではないかという。飯能市原市場白石にある。

○ナメ岩——樽沢の東、長沢川に大きな石があり、そのうえを近頃まで水が滑るように流れていたが、今はほとんど埋もれてしまったと土地の人は話された。飯能市長沢ナメ岩にある。

○戸立岩——高指の東、戸を立てたような岩がある。その南に旧浅間神社があったといわれ、神聖な岩だったに違いない。飯能市小瀬戸戸立岩にある。（現在はゴルフ場の敷地内かと思われる）

○前岩——又墓地を距てること西南百歩あまりにあり、前岩と称する磐岩あり。是を要するに山中すべて勝藥おほく、此岩上なかんずく眺望いと良し。（「新編武蔵風土記稿」より）早戸沢から登ってここまで来ると岩がそそり立ち、前は広場となっている。近くに牛頭大王が祀られ、御嶽八幡社もある。（「飯能市史」より）飯能市飯能前岩にある。

○乞食岩と貉岩——豆口入を廻り、豆口峠への中途に「貉岩」と並んでいる。向かって右が「乞食岩」である。名栗村上名栗にある。（「会報、武蔵247」より）

○子授けの石——双柳地区秀常寺の山門地藏様の隣に一抱えほどの平石がある。弘法大師のご利益であるとされている。

○弁天岩——祠等が祭られている。チャートである。吾野駅下。

○烏帽子岩——小瀬戸の釣り橋の下にある。

○久須美——白髭神社にある。

○檜岩——巨岩に檜が繁茂している。

## 26. 東松山市教育委員会

○室戸岩（市の川）——恋争いの空しさを知らしめんとして室戸姫が入水した。その後、この石に化したという。民話の項参照。

○龍の枕石——市の川橋付近の川底に横たわっている大きな石である。またの名を祐姫蛇体石とも言われている。松山城は前田利家らの軍により風前の灯火であった。利家は重臣達の切腹で多くの人々を助けようとした。折しも、城主不在の今、祐姫の一人の命に代えて家臣達を助けようとし、利家も同意した。そして、日没と同時に入水し果てた。祐姫は川の主の龍神になり、大きな石を枕にしていると伝えられている。一説に、石に化したと言い、祐姫蛇体石とも呼んでいる。

○枕石（利仁神社）——に関しては民話を参照。（「東松山市史 資料編第五巻 民族編」昭和58年より）

## 27. 日高市役所および瀧泉寺、靈巖寺

○獅子岩——新井南隣の獅子岩橋直下の高麗川左岸に露出する岩石で、石灰岩からなり、獅子が伏せているような形をしている。

○夫婦岩——高麗本郷の日向より日和田山へ向かう道の途中にあるチャートからなる二つの大きな岩である。

○天神岩——高麗小学校西隣の高麗川右岸に孤立しているチャート、緑色凝灰岩（輝緑凝灰岩では？）、粘板岩の複合した岩である。（以上「日高市史」自然史編より）

○天狗岩および大岩——瀧泉寺の前を流れる高麗川に「天狗岩」や「大岩」と呼ばれるものがある。日高市横手地区。

○靈巖——靈巖寺の寺号の由来となった岩石が出ている。⇒

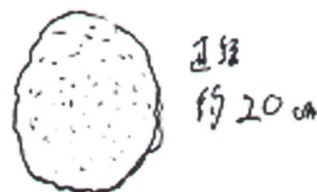


## 28. 深谷市役所および楡山神社

○岩笛——昔、柳瀬家番頭の石塚某なる者、主人の代参にて大洗磯前神社に参拝す。岩笛は同神社より賜ったものである。長さ30cm程の細長い石の中央に穴が通っている。この笛の音を聞き、その音を愛でて詠んだ柳瀬社司の歌が数首の短冊とともに、柳瀬家に保存されている。⇒

○岩鈴——直径約20cmのほぼ球形の火山石。中央に空洞があると思われ、空洞の中に小石が閉じこめられ、振ると音がする。物語などの言い伝えは無いが、柳瀬家伝来の物を明治年間に楡山神社社有の宝物とした。柳瀬家に保存されている。⇒

平野部ゆえ、言い伝えられている石は特にない。



## 29., 30., 31. 本庄市教育委員会、八潮市役所、与野市役所

平野部ゆえ、特に言い伝えられている石は無い。

## 32. 和光市役所

○力石——吹上観音の境内に大きな丸石が並べられている。力試しに持ち上げられた石である。氷川神社や諏訪神社といった鎮守社にも力石は見られる。

33. 蕨市歴史民俗資料館および和楽備神社

言い伝えられている石は無い。

34. 入間郡大井町教育委員会

○力石——亀久保明神神社にある。

35. 入間郡越生町

○大かみ岩——黒山に「大かみ岩」がある。狼がお産をすると言うので、何時も綺麗になっていた。（「埼玉県伝説集成」より）

36. 入間郡毛呂山町歴史民俗資料館

○硯岩——雨乞いの祈禱に当たり、使われた。毛呂山町宿谷にある。

○力石——毛呂山町阿諏訪の安藤家にある。

37. 大里郡大里村教育委員会

言い伝えられている石は特にない。

38. 大里郡岡部市教育委員会

○岡部隕石——昭和33年11月26日、岡部町の畑に人の背をかすめるように落ちてきた。

39. 大里郡江南町役場

○薬師堂（穴薬師）の石——樋春南の薬師堂は目の病に靈驗あらたかである。10月21日が縁日である。治ったお礼に穴のあいた石を奉納する習いがあり、そうした石が沢山納められていたため、石の重みで本尊の薬師様が沈んでしまったのではないかという人もいる。（「江南町史 資料編5 民俗」平成8年より）

40. 大里郡花園町教育委員会

○鬼の洗濯板——荒川層の砂泥互層

○青石礫岩——荒川にかかる冠水橋の下流約500mにある。鎌倉街道の渡河地点であった。これらの石は「川越石」や「青石」と呼ばれた。三波川変成岩である。

41. 大里郡寄居町教育委員会

○妹背の石（夫婦岩）——この石に祈らば子宝に恵まれると言われている。風布川沿いにある。

○稚児岩——鉢形城の舞姫・錦の姫は、城主の寵愛を受けて身ごもり、人目をはばかってこの岩の陰で子供を生んだと言う（「埼玉伝説集成」蕪塚より）。風布に稚児石がある。若侍が御殿女中と深い仲になり、ここで女兒を産んだと言う。

○百畳敷岩——風布地区にある。釜伏山北面の中腹にこの百畳敷岩がある。そこからは涸れることのない名水「日本水（やまとみず）」がでている。

○畠山重忠の馬の足跡石——鶯の瀬の上流3kmくらいの荒川の右岸に立岩という大きな岩がある。そこには馬の足跡のような穴がある。重忠が乗馬で坂を上る練習をしたときの跡だと言う。

○唸り石——猪久保に唸り石と言う石がある。猪俣小平六が、自分の館から投げた石だという。この石は木にぶつかって割れ、唸って飛んでいったという。今でも唸る。

○鬢盥石——末野地区にある。雲根志には、秩父郡波久礼村荒川の端に鬢盥石ありと書かれ、その穴の水、日照りにも涸れること無し。（前出）

○疱瘡神と胎内潜りの岩——風布地区姥宮神社に磐座を思わせる二つの巨大な石がある。これらは当社が遷座する以前から何らかの信仰の対象として祀られていたものと考えられる。現在、これらの一つが「疱瘡神」と呼ばれて、赤い注連を巡らし、岩の窪みには赤い幣が建てられている。もう一つは「胎内潜りの岩」と呼ば



れて、岩の下部の穴をくぐり抜けると、疱疹や麻疹が軽く済むと信じられている。参道の入り口には焼石なる丸石が置かれている（埼玉の神社」より）。

○畠山重忠乗り上げの岩——三品地区の白髭神社にある。社の傍らには周囲15m、高さ5m程の巨大な岩石がそびえ立つ。この岩は神が社殿に祀られる以前の斎場を示す物と考えられる（「埼玉の神社」より）。

○牛岩様——三品地区の明善寺前にある。牛のように大きな岩である。

○象ヶ鼻——寄居地区の荒川沿岸にある。川岩の岩の形から、寄居公園は象ヶ鼻と言われていた。ある年の洪水で鼻が流され、正喜橋下の「まんじゅう岩」になった。

○水神様——寄居町折原、上郷川原の白い石を拾い、水の中に沈めて水神様に供え、水難から守ってもらう。

○一の釜——寄居町鉢形地区に、荒川との合流点に一の釜と言われる淵がある。お椀やお膳が必要なときお願いをすると出してくれた。ある時、不心得者がいて、全部を返さなかったので、それ以来ででこなくなった。

○大丸釜——寄居町鉢形地区である。古い記録に「長久院、古き珠は、この釜より出ず」とある。長久院は鉢形城主北条氏邦の祈願寺で、寺宝として瑠璃色に光る珠があったという。これは、大丸釜から出たという。

○青岩——お茶々の井戸から川沿いを1.5km程東に下った荒川の中に青岩と呼ばれる岩がある。鎌倉へ行くとき、荒川を渡る目印の岩でここを渡り、男衾を通り嵐山へと鎌倉古街道が続いている。別名「獅子岩」とも言う。（前出）

○久下の達磨石——約300年前、忍城主が江戸城への貢ぎ物として秩父から達磨に似た自然石を運んだが、久下で沈んでしまった。大正14年、信徒によって重さ15トンの達磨石が引き上げられ、東竹院に安置された。（前出）

○身被岩——寄居地区荒川沿岸にある。

○升岩——鉢形地区荒川沿岸にある。

○蛙岩——鉢形地区荒川沿岸にある。

○烏帽子岩——鉢形地区荒川沿岸にある。

○川越岩——赤浜地区荒川沿岸にある。

○四十八釜——鉢形地区深澤河床にある。

その他、水神岩、蛇岩、丸岩、高岩、鳶岩、鋸岩、中岩、飛鼻、赤岩、二つ岩、お万が淵、川越岩等がある。

#### 42. 大里郡川本町

言い伝えられている石は特にない。

#### 43. 北足立郡吹上町教育委員会

○祟りの岩（？）——明用三島神社に向かって左の方に長さ9尺、幅5尺余の石の片面が現れていた。かつて、村人がこの石を掘り出そうとしたところ、忽ち祟りを被ったという。その後はこの石に手を触れる者がいなくなったという。（「中山道分間延絵図」第二巻、解説編より）

#### 44., 45., 46. 北埼玉郡北川辺町教育委員会、同郡騎西町玉敷神社、児玉郡上里町菅原神社

平野部ゆえ、言い伝えられている石は無い。

#### 47. 児玉郡神川町教育委員会

○地獄の鏡岩——国指定の特別天然記念物となっている。八王子構造線の滑り面である。高さ約4m、幅約9m、北向きで約30度の傾斜をしている。岩石は赤鉄石英片岩である。神川町二宮にある。「人影顔面の皺まで明細にうつりて、恰も姿見の明鏡にむかふがごとし」（「遊歴雑記」より）。敵の目標になるから、御嶽城の防備のためこの岩を松明で燻したため、赤褐色になった。さらに、高崎城（群馬）落城の時には、火災の炎が映ったとも伝えられている（説明板より）。

○子宝薬師（さね薬師）——浸食による自然石の窪みを女陰に見立てて、土俗信仰の対象となった物である。石製または木製の男根を奉納して祈願すると、腰や下の病に効能があるという。また、子宝に恵まれるという。（「神川町の文化財」1993より）



○駒繫石——源義家参拝の際に、この石に馬を繫ぎ止めた謂れのある石である。神川町二宮金鑽神社境内にある。（「御嶽城跡調査研究会報告」1995より）

○姥石様——渡瀬の南の外れにある。この石は三波石の48石の一つに数えられている。昔から、咳を治してくれると言い伝えられている。「咳」は「関」の字で、「関」はせき止めることを意味し、道祖神と同じように邪悪が村に入ってこないように村はずれに祀ったものである。神流川水辺公園入り口付近にある。（「神川町誌」1989より）

#### 48. 児玉郡児玉町町史編纂室

○福石——猪俣福石の通称湯脇谷にある。高さ1 m30cm, 周囲3 m, その形が大黒天に似ているところから名付けて福石という。

○瘤石——猪俣瘤ヶ谷にある。地表に出ている部分の長さは2 m30cm である。村人はこれを掘ると祟りがあるというので掘った人はいない。

○姥石——猪俣姥石にある。高さ1 m 余り, 周囲は6 m ばかりである。この付近を姥平と呼んでいる。

○鏡石——猪俣上平にある。高さ2 m, 幅1 m30cm, 横3 m あって, 上面が滑らかで鏡に似ているところから名付けられた。

○爺石——正円寺谷の南にある。高さ1 m30cm, 周囲6 m で, 現在は沢の中に落ち込んで流れに埋まっている。

○櫃石——薬師前大地台にあったが, 現在は美里村甘糟の岡寄氏の屋敷内に移った。長さ2 m, 幅1 m 程の物である。

○親子石——児玉地方に雉岡城がある。本丸東部の深い谷に三つの大石がある。二つはやや小さく, 半ば埋もれている。これを砕いて家に持ち帰ると子供の夜泣きが治ると言われている。持ち帰った石は子の親を慕うようにいつの間にか元の場所へ戻ってしまうと伝えられている。今では「夜泣き石」と言われている。

○駒繫ぎ石——別名「馬方石」あるいは「馬丁の化石」とも言われている。猪俣小平六の館跡にある。館の大手に当たるところで小平六がいつも愛馬をつないだ石と言われている。別伝あり, 又, この石を縄で縛って子供の夜泣きが治るように祈願する習わしがある。

○弁慶の洞穴——金鑽神社の社殿を過ぎて山道を登り「鏡岩」に達する。そこから更に登ると御嶽権現社があり, その側に不動尊と護摩垣石が並んでいる。その側の洞穴である。

#### 49. 児玉郡美里町役場

○猪俣のこぶヶ谷と祭祀遺跡——猪俣には「瘤石, 福石, 鏡石, 唸り石, 爺石, 姥石, 櫃石」からなる七名石と呼ばれる石がある。（前出）

○馬蹄石——猪俣地区にある。猪俣小平六が真田氏との戦いに敗れて, 館にたどり着いたが, 大手の門が開かないため, やむなく馬丁を館の中に放り込んで開けさせようとしたが, 馬丁は疲労のためが悶死して, 石に化けた。小平六の乗っていた馬の蹄の跡の石が残されている。

#### 50. 秩父郡大滝村教育委員会および三峯神社

○燕岩（つばくろいわ, つばくろのかしら）——現在名, 霧藻ヶ峰をさす。昭和8年8月秩父宮両殿下が三峯神社に新婚旅行でご宿泊されたおり, 白岩山に登る途中燕岩にて御休息をさ



秩父宮様レリーフのある霧藻ヶ峰



れた。そのとき、山頂付近が原生林で覆われ、樹木にサルオカセ（俗称きりも）が1m程に海草の様に下がっていたことから、殿下がこの燕岩に「霧藻ヶ峰」と命名されたのである。今はこの岩に殿下ならびに平成12年8月22日に除幕された妃殿下のレリーフが取り付けられ、6月の第一週目の日曜日には奥秩父連邦山開き祭（登山安全祈願）が行われている。妃殿下のレリーフを取り付けるときに余りにも岩が硬いので金属の鑿を大分使用したと言われている。霧藻ヶ峰の小岩の手前にある大きな岩である。これは個人所有である。⇨

○獅子岩——道のすぐ傍らに獅子に似た岩がある。大きさは1平方メートル位であるが、目の所が窪んでいて小石が入れてある。この小石を誰かが悪戯に取ると、雨が降ると言われている。目玉を取られてきつと泣いているのだと思われる。現在は下顎が無いが、これは今から80～90年前だと思われるが、心ない鉱物採集の学生に取られたという話も伝わっているが、よく見るとそれらしいところも見られる。三峰区吉ヶ谷（ねるがい、わるがい）と呼ばれる地にある。（「三峯神社誌」民俗編第一輯より）

○疣岩——ここの上に石が立ててあり（前には祠があった）、川の石が沢山上げてある。この石で疣をこすると疣が落ちるそうであるが、落ちたらそのお礼に川の石の一つ取ってきて上げるのが習わしである。（「三峯神社誌」より）現在、この岩はダム建設等によって無くなってしまった。埼玉大学寮脇に小祠が建てられ、そこに石があり、それを借りていつている。二瀬ダムを過ぎて埼玉大学寮のすぐ上である。⇨



○大日岩——妙法ヶ岳の奥宮神社下にある岩で、大日如来の形に似ていることから名付けられた。大日の注連つり場から遙拝することができ、土用の丑の日（夏の土用）には大日祭がある。今は境内の大山祇神社に神饌を供えて遙拝する。又、大日岩の所に風穴があり、本殿裏にも穴があって、そこから鶏を入れたら妙法ヶ岳のその風穴に出てきて鳴いたと言う伝承もある。

○どぼう岩——注連を張ると神体岩として信仰の対象となる岩のこと。名前の由来は不明である。角度を変えてみると男性のシンボル男根の形に見える。高さ2～2.5m程の物である。三峰地区にある。

○光岩——大滝村側から呼ばれた名前である。夜になると岩が光るところから名付けられた。荒川村側からは「おひじり（聖）岩」と言う。光る原因はこの岩の構成鉱物が関係していると言われている。この山と荒川を挟んだ対岸、つまり、この山が見える地を光岩と称し、現在光岩小学校（平成13年3月廃校）がある。又、山の所に祀られている稲荷社を光岩稲荷神社と呼んでいる。別の話ではあるが、江戸時代、大滝村中津川に平賀源内が金鉱の発掘に訪れている。大滝村巣場区にある。

○オヒジリ岩——大宮郷を基点とする近世の秩父往還は、白久（荒川村白久）を通っており、ここから分かれて大滝村の太陽寺方面へ通じる桜の峠山頂に「オヒジリ岩」がある。付近には、嘗てオヒジリ様の祠もあったという。オヒジリとは聖と考えられる他、白久の西南にあり、冬至の陽が没する所でお日尻の様に思える。荒川村白久（対岸、大滝村巣場区）（荒川村での謂れを地元の人に聴きました）

○夫婦岩——秩父御岳山登山途中にある岩。夫婦の形をしているところから名付けられてものと思われる。大滝村落合、御岳山。

○地藏岩——孫四郎峠の所にある。

○仏石山鍾乳洞——全長115m程。

○二つ石（三つ石）——元々大岩が三つあったが、木を流すのに不便であるため、真ん中の岩を割り、二つにした。

○天井岩の溪流

○霞岩

○小双里の鳶岩（二岩）——鳶に似ている二つの岩峰。

○十々六（とどろき）のコトコト石——昔あった大木が倒壊したときの轟き音から十々六木、コトコトは岩根の割れ目からわき出る水の音。

○市子岩の三角

○岩舟の奇勝

- 姥神社の鏡石
- カワウソのクソツピリの岩畳
- 霞岩の太岩岳
- 塩の岩の黒壁
- 女郎立岩
- ローソク岩
- 蛸沢の観音岩

その他に、立ち割れ二つ大岩、八人休場、休み石、三石の橋杭、岳岩と鷹岩等がある。

#### 51. 秩父郡小鹿野町 小鹿神社

○信濃石——大きさは1丈4尺くらいで、真ん中に2尺四方ほどの穴があります。この穴に耳を当てると、人の声が聞こえると伝えられている。この巨石は左右一対で、通称「福石」とも言われている。石成長伝説である。

昔、ある馬方が小鹿野と信州の間を馬を引いて往来していた。歩いていくと、馬の背に載せた荷物が片方に寄ってしまうので、馬方達は傾いた荷物を平らにするため、道ばたの小石を拾っては荷物に挟み挟み、小鹿野に着くのである。小鹿野に着くと、不要となった小石は道ばたに捨てられ、長い年月の中にだんだん成長して一丈四尺にもなったということである。この話は「風土記稿」にも見られる。小鹿野町下小鹿野の八剣神社社頭に存在する。芦田、立石、高根、木下、竹之内の各組ではその組で祭っている。民話の項参照。

#### 52. 秩父郡長瀬町教育委員会および宝登山神社

○日本武尊の腰掛け岩——今から約1900年前、日本武尊が東国平定のおり、当地に立ち寄り、宝登山への登山に先立ち、褌ぎをし、泉のほとりに休息したときの岩と伝えられている。宝登山神社境内にあり、150cm四方の岩で、石の背が山肌に埋まっていた不明である。

尚、長瀬町には「新編武蔵風土記稿」にも記されている「高砂石」の他、荒川沿いに名の付く石が点在している。

- 鷹岩（変成岩）
- 虎岩（脆雲母片岩）
- 紅廉片岩岩体（親鼻橋下）
- 石割りの松
- 秩父赤壁

（以上長瀬町史「長瀬の自然」平成9年3月より）

#### 53. 秩父郡皆野町教育委員会

○前原の不整合——皆野町大淵にある。ジュラ紀の地層を新第三紀の地層が覆っている。

#### 54. 比企郡小川町教育委員会および長福寺

○袈裟掛岩——小門と奈良坂の分岐点、通称「出口」付近の川の中に「袈裟掛岩」とか「衣掛岩」と呼ばれる岩がある。昔から、慈光寺へ登る僧侶が、出口の薬師堂で修行した後、川の中で身を清めるとき、袈裟を掛けた岩であると伝えられている。

○冠岩——慈光寺七石の一つ。都幾川村西平との境界付近に峙起している冠もしくは烏帽子に似た岩を言う。石質はチャートである。「慈光寺実録」には、「擬慈光山に行徒学徒の二派あり行徒は毎歳卯月十二日寄り三ッ峯を始め秩父郡山々岳岳を苦行修練し、六月十八日富士山に登り麓十七日而後当山へ帰る先自房へ入らず冠を解き法螺を吹いて自房に帰る時冠を解く所を冠岩と言う今に至っては諸人名を知る岩なり」とある。一方、大職冠（藤原）鎌足もしくは役小角が景色が良いため、休足の時、冠をおろしたとも伝えられている。

○戸立岩——小門山の氷川神社所有山と小久保文雄氏所有山の境界の沢に「戸立岩」と呼ばれる岩山がある。沢の両側に2、30mに及ぶ岩壁が切り立ち、まるで雨戸を立てたように見えることからこの名が付いた。

岩石はチャートである。(以上「氷川の里 上古寺」昭和60年より)

#### 55. 比企郡玉川村教育委員会

○天狗岩——田黒滝の入り口付近の道元平にある。謂れは不明だが、その形から名付けられたものと思われる。

#### 56. 比企郡都幾川村教育委員会および慈光寺

○明神淵——番匠に岩淵神社がある。裏手には都幾川が曲流して淵を作っており、そこを明神淵という。ここには地元の人から名付けられた「割れ岩」「鋸岩」「饅頭岩」「ばくろう岩」などがある。これらは三波川変成岩類の緑泥片岩で構成されている。本郷の白粉山には「白粉石」があり、滑石片岩で出来ている。

○カンカン石——田中の柿沼芳弘氏宅の石碑(1862)として置かれており、たたくとカンカンと澄んだ音がする。岩石は角閃石斑礫岩である。形は高さ約2m、巾約1m、厚さ約0.4mである。この岩石によく似た石は明覚地区の馬場付近に転石として見られる。その一つが「二つ岩」(前出)である。馬場、越生町鹿下境の所に奉ってある。⇒

○磁石石——別所の武井利夫氏宅にある。重さ1.54kg、直径15cmのまん丸い石である。同様な石が大野地区の勝負平で発見された。岩石は蛇紋岩であった。

○大槻の金石(玄武岩質凝灰岩)、大岩(玄武岩質溶岩)、西平の姥石(玄武岩質凝灰岩)、別所川上流の手水岩(玄武岩質凝灰岩)、大野のいなびら石(粗粒玄武岩)などは全て御荷鉾緑色岩類である。

○慈光寺七石——「慈光寺実録」に慈光寺七井、七石、七木が出てくる。七石は男鹿岩、女鹿岩を除いて慈光寺近くに所在している。牛石(信濃石)、琵琶石、冥官岩、稚児岩(童子石)、冠岩の七つである。

◎牛石(信濃石)——平湯の東端に白いこんもりした岩塊がある。長さ2.5m程のものが丁度大牛の寝姿に似ている。「牛に牽かれて善光寺詣り」に因んで信濃石と名付けられたともいう。岩石は石灰岩である。⇒



◎琵琶石——牛石の平湯から下った沢筋に琵琶石がある。楽器の琵琶に似ているため名付けられたものである。月の出ている静かな夜にこの石の傍らに立ち、耳を澄ませば琵琶の音を聴くことが出来るという。岩石は淡い緑色をした凝灰岩である。⇒



◎男鹿岩——桃木から弓立山への中腹あたりに赤茶色をしたゴツゴツした岩が突き出ている。これが男鹿岩である。この岩と都幾川を挟んだ女鹿岩には雄と雌の大蛇が棲んでいた。毎年7月7日に麓の都幾川で会っていた。しかし、ある年の旱魃で雌の大蛇がいなくなると、何時しか雄の大蛇も姿を消したという。岩石はチャートで、幅3~10cmの縞模様になっている。大附の武蔵丘陵カントリークラブ内の「吊し岩」もチャートである。⇒





◎女鹿岩（めがいわ）——三波溪谷の上流の山腹に女鹿岩がある。前述の通り、大蛇伝説がある。岩石は角閃岩である。高さは20m 程である。別所橋付近や天王山の「鳶岩」も角閃岩からなる。㊦（上左）

◎冥官岩（みょうかんいわ）——都幾川の支流後野川上流の後野に、二つの大きな岩がくっ付き合った冥官岩がある。高さ約10mの縞状チャートの転石である。二つのチャートの転石の間には間隙が出来ていて、冥界への入り口という言い伝えがある。㊦（上中）

◎稚児岩（童子石）——慈光寺川を遡っていくと、大きな岩が急斜面に突き出している。これが「稚児岩」である。ここには、稚児が身を投じた悲しい伝説が秘められている。昔、慈光寺に大切な来客があったおり、一人の稚児が来客の太刀のこじりを過って踏み、その失態を激しく叱責された。稚児はそれを苦に身を投じたという。それ以来、この岩に近づくとき稚児の忍び泣く声が聞こえるという。岩石は高さが約10mもある白色の層状縞状チャートである。少し下がった所の「弁天岩」も層状チャートである。㊦（上右）

◎冠岩——霊山院に向かう尾根道に鋭く平たく尖った岩が突き出ている。それが冠岩である。大きな岩ではない。昔、修行僧が秩父や富士の峰を回峰して帰ってきたとき、その僧が冠を解く目印とした岩である。岩石は白色層状チャートである。㊦



◎座禅岩——冠岩周辺の尾根筋には岩場が多い。この岩場の岩石が「座禅岩」である。これも白色層状チャートであり、冠岩と一連のものである。座禅をするのに都合がよい岩である。

◎小戸々石——下雲地区には採石場跡がある。この採石場から切り出された石が小戸々石である。大変硬く、真っ黒な岩石で輝石斑斕岩である。石材として使用されていた。

◎湯穴——氷川から多武峯神社へ向かう途中にある。1 m 程の穴の空いたのが湯穴である。昔は湯が湧いていたが、不浄の者が湯を使ったので多武峯の観音様がその源泉を蓑の葉に包んで上州へ投げてしまったと言う。その源泉の落ちたところが草津温泉になったという。白い壁は石灰岩である。湯穴は鍾乳洞である。

◎光岩——梶平周辺にある。淡いピンク色をした層状チャートである。時刻によって、太陽光を反射して光ることに由来する。

◎長岩——梶平周辺にある。山の斜面に細長く顔を出している岩石である。これもチャートである。かつて、ここを滑り台として遊んだ子供達もいたことだろう。

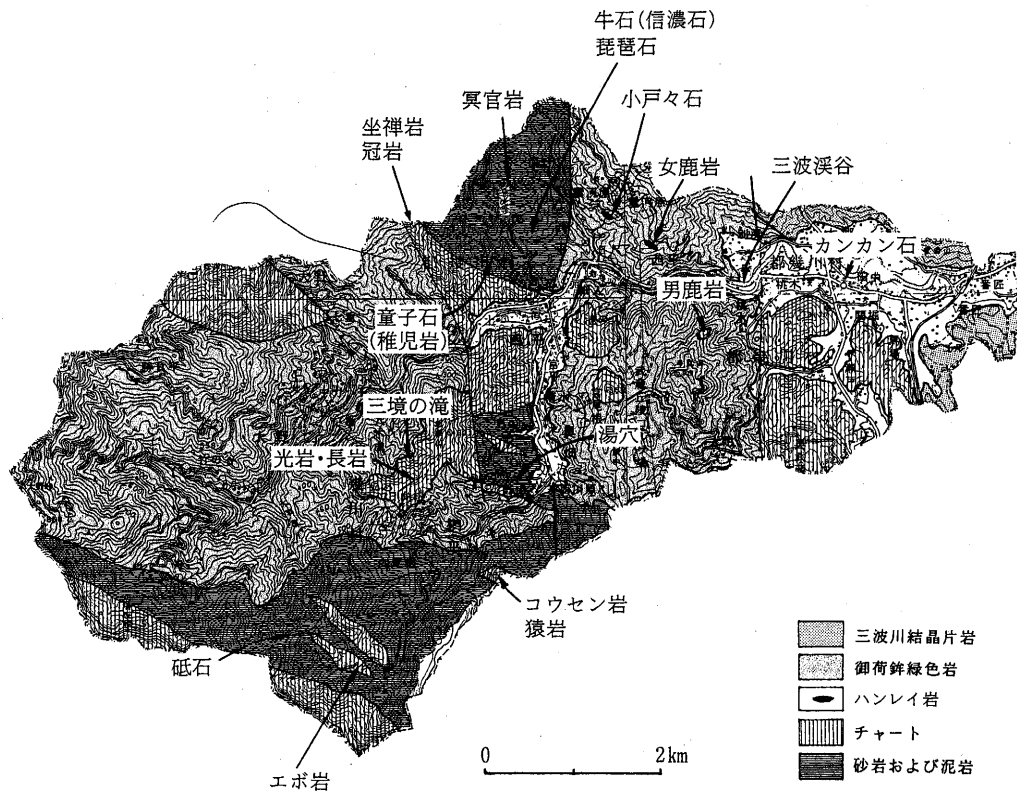
◎猿岩、コウセン岩——梶平周辺にある。山の斜面に大きな岩場が顔を出している。向かって左側がコウセン岩で、その右上が猿岩である。これもチャートである。

◎エボ岩——梶平周辺にある。梶平からブナ峠を進むと丸い巨石がある。丸いエボ（疣）のようなことから名付けられた。岩石は層状チャートである。㊦

◎砥石——ブナ峠から梶平への小さな崖は砂泥互層である。砥石に似ていることから名付けられた。



（以上「都幾川村史」地理編，平成11年より）



都幾川村地質図 (国土地理院発行の5万分の1地形図「熊谷」「寄居」「秩父」「川越」を利用)

## 57. 比企郡嵐山町教育委員会

○座禅石——畳半畳ほどの岩である。万福寺が火災の時、本尊の阿弥陀如来が火中より発走して、この岩の上に鎮座していたという。

○水切り石——嵐山町史に納められている。

## II部 石造物 (加工されたもの)

次に、加工された石造物について見ていこう。「鶴ヶ島市の石造物」の中に次のように述べられている文章がある。即ち、石造物には形と内容・用途があり、鳥居、石灯籠、手水鉢等と言うようにそれに相応しい名称が付けられている。しかし、一方、神仏浮彫像、神仏文字塔、供養文塔等の石造物や、顕彰碑、記念碑等といったものはどのような形態として捕らえ、呼称して良いのか困る場合があるというのである。ここでは各々について詳しく述べることはしないが、書物の中に石造物を22種類に分けて記載してあるので、それを先ずは参照したいと思う。基本的な呼称としてとらえられると思う。

神仏丸彫像——神仏の像を独立の像として彫刻したもの。

神仏浮彫像——神仏の像を石面中央に浮き彫りにしたもの。

神仏文字塔——神仏の名を石面中央に文字で刻んだもの。

供養文塔——造塔や供養の趣旨を石面中央に刻んだもの。

石祠——社殿や堂宇の形の石面中央に神仏名を刻んだもの。

板碑——中世の供養塔の一種で板石塔婆とも言われるもの。

五輪塔——供養塔の一種で五行の塔形のもの。

宝篋印塔——供養塔の一種で経典を収めたもの。

無縫塔——僧侶の墓塔の一形式。いわゆる、筆子塚の一部も含む。

墓塔——中央に死者の実名や法名を刻んだもの。

顕彰碑——個人の業績を讃えたもの。又、墓碑銘、忠魂も含む。

記念碑——行事，事件，開拓の記録などを刻んだもの。

鳥居——神社など神道的な聖域を示す構築物。

石灯籠——寺社に奉納された灯明をつける塔。

石像——唐獅子，狛犬や猿などの丸彫り像。

手水鉢——寺社などでうがいや手洗いのために置いた容器。

旗立石——幟（のぼり）や旗を立てるための杵杭。

社寺標——寺社の場所や遺址を文字で示したもの。

台石——建築物の下部を構成するもの。

道標——道路の原点や方向を記したもの。

境石——社寺などの境界を文字で示したもの。

石橋——橋石とも言う。橋板に用いられたもの。

しかし，今回の問い合わせに対し，回答していただいた所が以上のような種類分けをしているわけではないので，それなりに見ていって頂きたい。又，その中でも，板石塔婆と庚申塔は興味深いものであるのもので，それについて幾つかの文献から引用して述べてみよう。

まず，板石塔婆であるが，その起源については，碑伝（ひで）説（修験者の造る碑伝より転化したとする考え），五輪塔説（長足五輪塔形を簡略化して造られたとする考え），笠塔婆説，平城京址出土の人形が板碑の祖形であるとの説，宝珠が変形して板碑の祖形が出来たとする説などがあるようである。

そして，板碑と同形のものは，既に，平安時代末期の絵巻「飢餓草紙」や「北野天神縁起」等に見られる。しかも，それが木製であると考えられるので，板碑の初期には京都を中心として，その名の通り，まさに木製板碑が造られていたとしても不思議はない。だが，これらの絵巻に見られるものは，胎蔵界大日種子であるのが特徴的である。しかし，時代が下って鎌倉時代後半になって，関東地方に板碑として発生するときには阿弥陀如来の容像または種子として現れ，その後，関東地方を中心にして板碑の造立が広まっていった。その背景には，二つの大きな理由が考えられる。即ち，一つは，平安時代末期からの末法思想に続く新興宗教である浄土教の台頭と急速な地方への進展と，二つには，無情観を持った鎌倉幕府の御家人が各地に赴任したことが上げられる。つまり，その土地に産する石に合わせて自らのあるいは家族のための板碑を造立したのであろう。

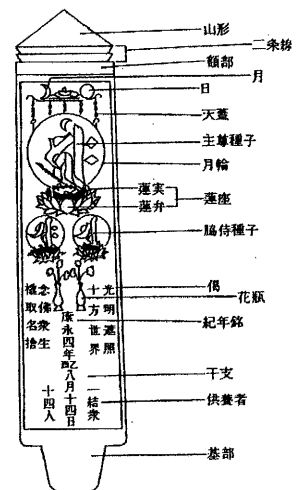
そして，板碑造立の初めの頃は，武士階級の人々が，死者の冥福を祈る追善や供養者自身の死後の安楽を求め，生前供養（逆修）等を目的として建てられたものと考えられる。

その後は，逆修のものが増加してくる。室町時代中期以降は板石塔婆の本来の性質が変わり，月待供養，日待供養，申待供養等の結束板碑の造立が多くなる。

板石塔婆は，一般に，板碑（いたひ，いたび，はんび，ばんび）とか，青石塔婆などの呼び方がある，中世に造立された石製塔婆の一つである。分布は全国的に及んでいるが，最も多く分布するのが関東地方で，特に埼玉県内には約二万基（昭和55年9月現在で，20201基が確認されている）の板石塔婆が明らかになっている。埼玉県を中心とする「武蔵型板碑」は荒川上流秩父郡長瀨周辺で産する三波川変成岩類の一種である緑泥片岩（秩父青石）を用い，整った形に作られ，板石塔婆の典型とされている。緑泥片岩の入手に困難な地域では花崗岩，安山岩，石英粗面岩等を用いたので，形も柱状に近い，形の崩れた板碑が作られている。ただ，九州のように凝灰岩を用いた地方では，石が軟質で加工が容易であるためか，厚みはあるが優秀な手法を示すものが多い。三波川変成帯に位置する関東（秩父地方）や徳島県方面では緑泥片岩を多く使っている。

最も古い板石塔婆は，大里郡江南町須賀広の嘉禄3年（1227）銘で，陽刻の弥陀三尊像である。造立の最盛期は南北朝時代である。戸田市妙顕寺の慶長3年（1598）銘を最後に終わりを告げている。

一方，庚申塔は，板石塔婆同様，初期には武士階級の人々により造立されたが，室町時代以降，庶民の間で，仏教思想や神道思想に融合された道教思想などより，庚申塔造立が盛んに行われた。



板石塔婆の部分名



「庚申」とは、即ち、カノエサル（年）の日をさしており、60年毎あるいは60日毎に巡ってくる日のことである。この日を特別の意味ある日とみて、宗教的な行事を行う組織（庚申講、庚申待）は、広く民間に広まっていたのである。これは、主に、道教思想に基づくもので、「人間の体内に生息する三尸と言う三匹の虫がいて、庚申の夜、人が寝ている間に天空に昇り、天の神に人の罪過を告げる」と言う説である。そこで、人々はこの晩を大いに恐れおののき、他出をはばかり、家の中で謹慎していなければならないとして、「守庚申」を強く要請されたのである。

庚申信仰は農山漁村の地域社会単位で行われる庚申講、庚申待に典型的に見られるが、族縁、地縁、家族単位等でも行われた。庚申の日の夕方には、皆が集まり、真言庚申を唱え、食事をし、夜を徹して語り明かすのが一般的である。

又、三尸は、上尸は色欲、中尸は愛欲、下尸は貪欲とも説明され、それらを慎むことで、福・禄・寿を得る道とされている。

更に、庚申供養神に青面金剛を例えとすることが多かったことから、仏教、特に修験道の影響が強かったものと考えられる。また、庚申待は申待とも言われ、猿の信仰とも結び付いて、猿を神使とする山王権現の信仰にも連なっていく。そして、猿田彦神を連想させるように、神道の影響も受けているのである。



### 1. 朝霞市教育委員会

◎地蔵菩薩——田島地区富善寺2体、浜崎地区地藏堂2体、同観音堂

◎石碑——根岸台地区渡辺家（明神大神、自然石）、同高橋家（柳権現位、駒形）

◎石祠——岡地区氷川神社、膝折地区子の神氷川神社 ⇨

（「朝霞の石造物Ⅰ」および「朝霞の石造物Ⅲ」より）



### 2. 岩槻市 久伊豆神社

◎青石塔婆（板碑）——言い伝えは不明である。緑泥片岩で出来ている。

### 3. 浦和市役所

◎板石塔婆——大門地区大興寺、白幡地区医王寺、大崎地区国昌寺、山崎地区飯野家、同宝蔵院、中野田地区明照寺2基、間宮地区長福庵寺墓地、別所地区真福寺、北原地区石井家、関地区東福寺、上木崎地区市文化財資料室、三室地区報恩寺、北浦和地区廓信寺、上野田地区旧興音寺、中尾地区福生寺

◎五輪塔及び宝篋印塔——山崎地区宝蔵院墓地、原山地区玉蔵院、同王蔵院、宿地区観音寺、大間木地区宮前墓地内篠原家、白幡地区観音堂、別所地区真福寺、上木崎地区市文化財資料室、大崎地区国昌寺、関地区東福寺2基、三室西宿地区北向地藏、瀬が崎地区東泉寺2基、大牧地区大北釈迦堂、仲町地区玉蔵院、大門地区大興寺 ⇨ ⇨

◎庚申塔——三室南宿、広ヶ谷戸稲荷越、道場地区金剛寺、南浦和地区大谷場小学校、栄和地区重円寺、鹿手袋地区宝泉寺、大牧地区清泰寺3基、五関地区東福寺、沼影地区広田寺、同観音堂、大間木会の谷、中野田地区重殿社、大間木地区八丁目自治会、中尾駒形、寺山地区猿田彦大神、元町地区八雲神社、大久保領家地区日枝神社前、本太地区観音堂、領家、大東地区大東北公園、町谷地区慈観寺、中尾地区中尾神社前、南部領辻、太田窪、西堀、笹目地区平等寺

◎日待供養塔——上大久保地区県立衛生短大近く、下大久保地区諏訪社、大牧地区清泰寺、太田窪

◎六面堂幢——原山地区玉蔵院、常盤地区成就院、鹿手袋地区不動堂、町谷地区慈観寺、栄和地区重円寺

◎阿弥陀如来——宿地区観音寺2基、中尾地区吉祥寺、馬場地区観音堂、中尾不動谷地区大聖不動堂2体、





三室地区松木地藏堂，大間木会の谷地区旧円盛院，大谷口地区旧安楽寺，栄和地区重円寺，太田窪地区行弘寺，瀬が崎地区東泉寺

◎薬師如来・釈迦如来——大間木附島地区薬師堂，辻地区和光院，四谷地区観音堂2体

◎大日如来——仲町地区玉蔵院，道祖地区地藏堂，辻地区和光院，大間木附島

◎観音菩薩——町谷地区薬師堂，栄和地区重円寺，道場地区金剛寺，南部領辻地区五斗蒔橋付近，高砂地区埼玉会館付近，大谷口地区旧安楽寺，三室大古里，三室松木，大久保領家地区大泉院，沼影地区観音堂，大牧地区大北釈迦堂，南浦和地区御蔵観音，大間木附島，本太地区延命寺，大間木会の谷

◎地藏菩薩——宿地区観音寺，北浦和地区廓信寺，白幡地区観音堂，町谷地区慈観寺，大谷口，田島地区観音堂，太田窪地区普門寺，内谷地区普門寺，曲本地区一乗院入り口2体，大久保領家地区片町墓地，馬場，南元宿地区華蔵寺，大谷口，仲町地区玉蔵院，辻地区万蔵寺，大牧地区清泰寺，井沼方地区薬師堂，大間木附島，沼影地区観音堂

◎諸供養塔——（徳本念仏供養塔）大興寺，瀬が崎地区東泉寺，中尾地区吉祥寺，（石橋供養塔）五関地区東福寺，（弘法大師供養塔）大門地区大興寺，（足立百不動供養塔）太田窪地区行弘寺，（出羽三山供養塔）辻地区万蔵寺，（題目塔）大牧地区大北釈迦堂2基，（大日如来種子塔）根岸地区根岸公会堂，（榛名山満行宮大権現）三室東宿地区薬師堂筋，（三界万霊塔）井沼方地区薬師堂，仲町地区玉蔵院，（札所等奉拝礼供養塔）仲町地区玉蔵院，（新四国創設碑）仲町地区玉蔵院，（四国廻国標石）栄和地区重円寺，（足立六阿弥陀標石）北原地区無量寺，（百万遍供養塔）上野田地区守富家前，（百万遍普門品供養塔）瀬が崎地区東泉寺，（大乘妙典供養塔）瀬が崎地区東泉寺，芝原地区地福院，（榛名三峰大権現）宮本地区氷川女体神社，（出羽三山供養塔）大崎地区国昌寺，（石橋供養塔）松本地区真乗寺，常盤地区国道17号端，塚本地区釈迦堂

◎墓碑——（春日一族の墓）大久保領家地区大泉院，中野田地区明照寺，見性院，大牧地区清泰寺，（二階堂資朝夫婦の墓）駒場地区蓮昌寺，（吉祥寺実尊墓）中尾地区吉祥寺，（大雲文龍墓）大崎地区国昌寺，（胤體墓）大牧地区清泰寺，（玉林院歴代墓）中尾緑島地区玉林院，（橘三喜墓）宮本地区，（中村吉照婦人墓）北浦和地区廓信寺，（人見一族の墓）大久保領家地区大泉院，（小泉蘭斎墓）北浦和地区廓信寺，（西念法師塔）吉川町地区西念院

◎標石——（二・七市場定杭）常盤地区慈恵稲荷神社，（守護侍不入石杭）仲町地区玉蔵院，西堀地区医王院，（阿弥陀堂）西堀地区，（道標）鹿手袋地区宝泉寺，（近禁葦酒標石）大久保領家地区大泉院，（堂）塚本地区釈迦堂，（百度石）上木崎地区足立神社，（足立百不動第一番標石）東中尾地区，（道路元標）領家地区長寛院前，（足立百不動第三番碑）中尾中丸地区

◎兎，狛犬，手水鉢——（兎）岸町地区調神社，（手水鉢）大門地区大興寺，同大門神社，白幡地区睦神社，塚本地区薬師堂，（狛犬）寺山地区足立神社，西堀地区氷川神社，駒場地区蓮昌寺⇒（狐像）白幡地区睦神社

◎不動明王——大間木宮前地区宮前墓地，文蔵地区明神社，上木崎地区正福寺，大崎地区太子堂，元町地区八雲神社

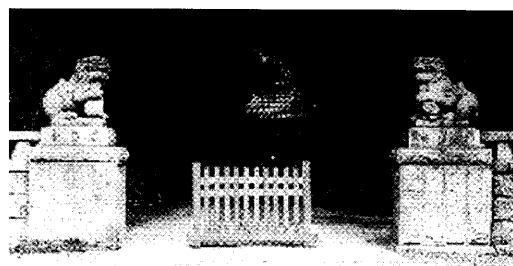
◎弁財天・道祖神——南浦和地区小池弁財天，大久保領家地区日枝神社前，白幡地区医王院

◎石祠・神名碑——（市神石祠）常盤地区慈恵稲荷神社，新開地区水天宮，（山神石祠）原山地区稲荷社，（疱瘡神石祠）栄和地区東神社，（石祠）岸町地区調神社

◎鳥居・華表——（石鳥居）本太地区三角稲荷神社，寺山地区天神社，同足立神社，中尾地区中尾神社，内谷地区氷川社，（華表）大間木附島地区吉田家

◎石灯籠——栄和知区重円寺，内谷地区一乗院，岸町地区調神社，中尾地区中尾神社，太田窪地区行弘寺，同氷川神社，宮本地区氷川女体神社

（以上「石の文化財—浦和の石造物—」平成8年および「浦和市史 通史編 I」昭和62年より）



## 5. 桶川市役所

◎板石塔婆——桶川宿地区足立遠元館跡6基，浄念寺境内11基，大霊寺境内2基，武笠金助家2基，難蔵院

墓地4基。下日出谷地区知足院26基，光明寺跡19基，勢至堂8基。町屋地区大野博家5基。(以上昭和30年の「桶川町史」より) 昭和41年の調査では20地点112基を確認した。昭和55年の報告書では破片を含めて60地点364基(加納地区133基，旧桶川地区136基，川侘谷地区95基)であった。昭和56年には71地点470基(加納地区179基，桶川地区167基，川侘谷地区24基)を確認した。(「桶川市史」第三巻資料編に載っている。分布は別紙地図に記されている。)

◎石仏像——阿弥陀如来立像，不動明王座藏，本学院。金剛力士像，西峰の堂。薬師如来座像，大日如来座像，地藏菩薩座像，観音院。金剛力士像(阿吽)，泉福寺。地藏菩薩立像，旧円林堂。馬頭観音菩薩立像，観音堂。地藏菩薩立像，釈迦如来立像，南の堂

○桶川市の石仏・記念碑の一覧

薬師如来3体，如意輪観世音菩薩4体，馬頭観世音菩薩120体，地藏菩薩14体，弁財天・大黒，庚申56基，名号等1基，廻国巡礼・經典読誦供養塔20基，供養塔12基，石神4体，常夜灯5基，道標5基⇒⇒，その他12基



## 6. 春日部市 圓福寺

◎板石塔婆——境内より出土した。現在，本堂内に保管している。元弘3年銘のもの。

◎石塔——圓福寺第九世住職断食中の名号入り(南無阿弥陀仏)の刻まれたものである。享保年間のもの。境内に建っている。

◎曼陀羅堂(享保8年)解体(平成5年)の時に出土の石——表面に墨文字で書かれた石が多数出た。曼陀羅堂に保管されている。

## 7. 加須市教育委員会

◎利根川旧堰堤跡の碑——外野地区

◎板石塔婆(青石塔婆)——由井が島地区神宮寺3基，南篠崎地区普門寺6基，南大桑地区乗蔵院(建長5年)，平永地区金道院，不動岡地区総願寺，同宝生院

◎散蓮華模様青石塔婆——不動岡地区

◎十三仏青石塔婆——不動岡地区

◎石敢当——中央地区千方神社⇒

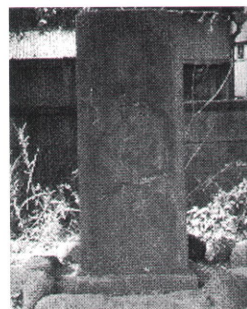
◎設楽家累代の墓——馬内地区香積寺

◎芭蕉翁句碑——不動岡地区総願寺，平永地区八幡神社⇒

◎小川朝政の墓——大越地区徳性寺

◎松村佐左右衛門の墓——志多見地区村松家

(以上「加須市の文化財」平成4年より)



## 8. 川口市役所

◎宝篋印塔——船戸町地区の善光寺にある(元は陀羅尼(呪文)を納めておく塔であったが，後に供養塔または墓石として用いられる。このものは黒味のある安山岩小松石で出来ている。高さ148cmである。)

◎石灯籠——安行吉蔵地区にある。材質は花崗岩である。高さ176cmである。

◎八幡宮石祠——赤山地区にある。伊奈忠順の碑文。

○その他，龍派禅珠の墓，代官熊沢家の墓，安行苗木開発の祖吉田権之丞の墓などがある。

(以上「川口の文化財」より)

## 9. 川越市立博物館および喜多院，氷川神社，古尾谷八幡神社

◎雲南国の石——松平信綱寄進で，三芳野神社の社宝の一つ。玉子状の石に瑠璃色の糸状の条が複雑に入っ

ている。岩石名は不明である。加工品ではないか。

◎鶏卵石——同上の社室の一つである。鶏卵程度の大きさで加工品と思われる。

◎台座石——喜多院に亀の形をした灯籠か石碑のものである。

◎溶岩が使われている塚——八つ島地区稲荷神社末社御嶽神社、木の目地区稲荷神社末社御嶽神社

◎石剣——氷川神社の社室で、祭具として用いた。滑石製である。

◎万葉歌碑——氷川神社1基

◎礼拝塔——氷川神社数基

## 12. 熊谷市教育委員会および高城神社

◎熊野堂（くまんどう）の碑——熊谷氏の館跡の一部か。後世に伝えるために大正2年に建てられた。高さ3m。

◎巨石「大黒天」——中奈良地区の小島邸には高さ1.3m、幅80cmもある秩父青石に掘られた「大黒天」の巨石がある。

◎針塚——正光寺にある。井上奈遍子女史のために、そのお針子達が建てたものである。

◎権八地藏または物言い地藏

◎双体道祖神

◎庚申塔——西河原地区にある。青面金剛が左手にショケラ（赤児）の頭髪を吊している市内としては珍しい型である。

◎酒樽の墓——明導寺にある。（以上「新編熊谷風土記稿」昭和38年より）

◎石鳥居——高城神社のもの。現行田市忍城主阿部豊後守忠秋献納。小松石で出来ている。

## 14. 越谷市 清浄院

◎板碑（板石塔婆）——10基程ある。清浄院開山上人の碑もある。

◎供養板碑——約30×30×1cm～30×60×1cmのものまで各種ある。

## 15. 坂戸市教育委員会

◎疣地藏——疣取りにご利益あり。

◎大家ヶ原歌碑——四日市場地区、坂戸高校の前に建っている。万葉集の東歌ゆかりの歌碑である。

◎北辰尊星碑——森戸地区、国涓地祇神社境内にある塚。由来は不明である。

◎吉原地蔵——森戸地区、六部の霊と吉原の遊女の霊を祭る。婦人の病にご利益がある。

◎鍛冶屋地藏——森戸地区、延命地藏、子育て地藏として親しまれている。1758年造立される。

◎一本松の地藏——厚川地区、六道の辻にあったが、道路拡張により移転した。子供の成長を願う。

◎延命地藏

◎竹内啓碑——幕末の志士。本名小川嘉助。松戸で斬首された。

◎ばとうかん——北浅羽地区、馬頭観音等の石碑が建つ塚。馬の安全祈願の聖地。

◎板石塔婆——北浅羽地区、万福寺境内にある。浅羽行成を供養した板碑。1307年造。

◎子育て地藏——堀込地区

◎入西口説き歌碑——新堀地区、入西公民館内に建つ。入西地区の大字を読み込んだ莫蘆編みの作業唄。

◎大日如来石像——北峰地区、福正寺跡にある。1683年造。

◎疣地藏——北大塚地区、豆俵を供えて祈る。1719年造。

◎一里塚——中里地区、榎木と石仏が残っている。

◎勝軍地藏——浅羽地区、長久寺にある。猪に乗る甲冑姿の石像である。1729年造。

◎板石塔婆——浅羽地区橋場にある。念仏衆の結衆板碑である。1312年造。

◎摩利支天——浅羽野地区、天然理心流の横田正秀が建てた石碑である。1859年造。

◎万葉集遺跡浅羽野——浅羽野地区にある万葉集ゆかりの旧跡。

◎正達地藏——泉町地区、耳の病にご利益あり。1688年造。

- ◎旧日光街道の碑——上吉田地区、吉田の松の脇に建立した。1980年造。
- ◎道興の歌碑——片柳地区にある。
- ◎万治高尾の墓——仲町地区、永源寺内にある。嶋田重三郎との恋物語で知られる遊女の墓と言われる。
- ◎日光街道の道しるべ——元町地区、坂戸小学校正門前に建つ。1760年造。
- ◎道祖神——市内唯一の文字塔。1771年造。
- ◎耕地整理記念碑——嶋田地区、1935年造。
- ◎井上淑蔭墓——石井地区にある。
- ◎千葉常胤歌碑——塚越地区にある。
- ◎宝篋印塔——塚越地区、西光寺にある。勝氏ゆかりの遺物。
- ◎よしみの歌碑——横沼地区にある。

## 17. 草加市役所

- ◎板碑——市内には40基の板石塔婆がある（住吉町、神明町、瀬崎町、両新田西町、谷塚上町、柳島町、遊馬町、弁天町、中根町、小山町2基、谷塚町4基、新里町7基、青柳町8基、柿木町10基）。制作年代、遺物名、寸法、所在地は下記書物に載っている。
- ◎石造物——灯籠、石垣、宝篋印塔、鳥居、記念碑、供養塔、各種神像、各種地蔵菩薩、手洗石、標柱、歌碑、墓碑、馬頭観音、狛犬、庚申塔等多数の例が各町内毎に報告されている。（以上「草加の金石」昭和59年より）
- ◎片目の女体様——麻の葉で片目を失った女神。
- ◎疣地蔵——この地蔵に供えられた線香の灰でこすると疣がとれると言われてきた。又、あげられている石を借りてきて、それでこすると好いと言われた。お礼には石を二つにして返す。青柳町、松江町（瓶かぶる地蔵）、新谷町、清門町地区にある。
- ◎安産の地蔵——八条用水の笹橋近くにある。産気づいたらお詣りをするとお産が軽く済む。然も、良い子が産まれるという。一方で、疣地蔵とも伝えられている。
- ◎子育て地蔵——高砂地区の地蔵である。赤堀を流れてきたのを、浅古家の先祖が拾い上げたという。浅古家では、それまで、子宝に恵まれなかったのを、それを子育ての地蔵として祀ったことによる。
- ◎夜泣き地蔵——八幡町観音寺には子供が夜泣きをして困るとき、お願いをすると治してくれると言うので、夜泣き地蔵と言われてきた。
- ◎火あぶり地蔵——瀬崎町に火あぶり地蔵がある。これは火付けの大罪で火炙りになった哀れな娘の供養のために建てられた。千住に母娘が住んでいた。借金を残して父が死んだため、働いても生活は苦しかった。そんな折、瀬崎村のお大尽の家に女中奉公に上がるようになった。皆に可愛がられていたが、ある時母親が重い病に倒れ、娘に会いたいという。しかし、暇をくれず、ついには、「この家が焼けてしまえば・・・」と思いこみ、火をつけた。幸い、発見が早く、多少は焼けたものの人に被害はなかった。詮議の結果、娘の仕業とわかり、火炙りの刑に処せられた。後に、事情を知った村人達は親孝行の娘を哀れに思い、冥福を祈って地蔵を建立した。
- ◎病を治してくれる地蔵——神明地区の東福寺にある。体の痛い人がその地蔵の体の同じ部分を撫でると治してくれると言う。
- ◎亡き娘を偲ぶ弁財天——稲荷町の慈尊院の墓地は二分されている。一方は大きく立派な墓が並び、一方は小さな墓ばかりが並んでいる。その小さい墓ばかりの墓地の一番奥に地蔵様が祠られている。その右足元に「御玉弁財天」の碑がある。江戸末期、立野堀村（現、稲荷町）から分家して草加宿（現、神明）に居を定めた若夫婦に女の子が産まれた。やがて、縁あって、江戸のある武士の養女にもらわれた。しかし、ある日突然病にかかり、そのまま命を閉じてしまった。娘の出世のためとはいえ、手放した生みの親の悲嘆と悔恨は深く、亡骸を引き取りたいと言った。一方、養父母も僅かの間でもわが子であるので、縁を切るわけには行かないと言って、互いに譲らなかつた。話し合いの結果、生みの親の菩提寺に葬るが、両家の名前を刻んで二組の親を忘れないようにと願ったものとした。地蔵様は子供を導いてくれる仏様であるというので、その足下で生まれ変わって弁財天となって仏の道に仕えてくれるようにとの願いを込めて作ったのが、「御玉弁財天」であ

る。

◎馬頭観音——百日咳（神明地区）、味噌炊き（長原地区）

◎不動様——賭事にご利益がある。西町地区

◎ヘイナイ様——住吉地区の氷川神社にある。耳の病を治してくれる。（以上「草加市史 民俗編」より）

## 18. 秩父市教育委員会

◎石経蔵——下宮地町地区の広見寺の裏山にある。礫岩をくり貫いた石室に、数千個の河原の石が蔵され、その石面に丹念に般若経が書かれている。

◎板石塔婆（青石塔婆）——寺尾地区の光正寺にある。秩父に残る丹党関係資料のうち最も貴重なものである。高さ177cm、幅60cm厚さ8cmの秩父青石（緑泥片岩）で、延慶3年（1310）丹党中村、長田一族が先祖供養のため建立した。

堀切地区の板石塔婆は鎌倉時代における浄土宗の念仏往生の信仰により、造立の隆盛を見たという。（以上「秩父の文化財」平成2年より）

## 19. 鶴ヶ島市役所

北地区、西地区、南地区、東地区、戸宮地区の順で示す。

◎神仏丸彫り像——55体（13-18-12-12-0）⇒

◎神仏浮き彫り像——44体（15-11-8-10-0）⇒ ⇓

◎神仏文字塔——46基（12-4-14-8-8）⇒

◎供養文塔——14基（0-8-2-4-0）

◎石祠——13基（8-1-3-1-0）

◎五輪塔——4基（1-0-2-1-0）

◎宝篋印塔——9基（2-3-4-0-0）

◎無縫塔——9基（0-7-1-1-0）

◎墓塔——3基（0-2-0-1-0）

◎顕彰碑——10基（5-3-1-1-0）

◎記念碑——19基（7-5-5-0-2）

◎鳥居——4基（0-1-1-1-1）⇒

◎石灯籠——19基（8-4-2-2-3）⇒

◎石像——2体（0-0-1-0-1）

◎手水鉢——7基（1-4-1-0-1）⇒

◎旗立石——7基（1-4-1-0-1）⇒

◎寺社標——12基（3-3-5-1-0）⇒

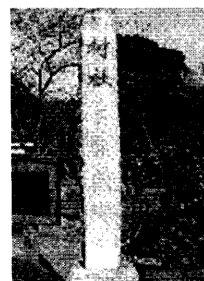
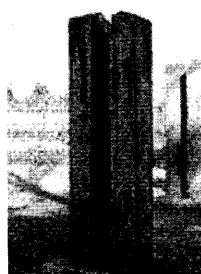
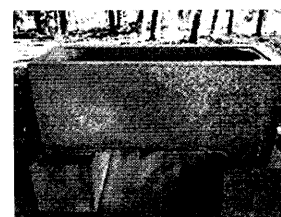
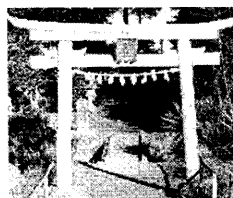
◎台石——4基（2-0-1-1-0）

◎道標——2基（2-0-0-0-0）

◎境石——1基（0-0-0-0-1）

◎石橋——2基（0-1-1-0-0）

（以上「鶴ヶ島の石造物」1998より、東西南北に分け、時代、表面文字、写真、拓本など様々な角度で調査が行われている。）



## 20. 所沢市教育委員会

◎顕彰碑、歌碑、句碑、標石等はある。

## 21. 戸田市役所

◎板石塔婆——234基。その詳細は「戸田市史」資料編1に載っているとのことであるが、手に入れられな

かった。1253-1598年までの346年間に渡り造立した。年代の明らかなものは146基である。阿弥陀一尊種子板石塔婆（観音寺，鎌倉時代），阿弥陀三尊種子板石塔婆（正覚寺，宝蔵院，鎌倉時代：平等寺，観音寺，南北朝時代），阿弥陀一尊，阿弥陀三尊種子板石塔婆，南無妙法蓮華經の七字題目板石塔婆，南無阿弥陀仏の六字名号板石塔婆が多く造立された（室町時代）。銘題目板石塔婆（江戸時代），月待ち供養塔等

◎石鳥居（1714），石灯籠（1797），手水石（1832），狛犬（1933），幟立石（1859）（以上笹目神社）

◎羽黒山供養塔（1802），手水石（1802），狛犬（1802）（以上氷川神社）

◎幟立石（1836），手水石（1774），庚申塔（1774），富士講碑（1830）（以上氷川神社）

◎石鳥居（1798），講浸透（1673），光明真言供養塔（1916），手水石（1776），狛犬（1801），羽黒山供養塔（1802），手水石（1817），芭蕉句碑（1824）（以上氷川神社）

◎五輪塔4基（1657），六地藏附石幢，石灯籠（1595），石造聖観音立像（1626），石造地藏菩薩立像（1653），駒型庚申塔（1722），笠付き庚申塔（1819），光明真言塔（1800，1813），大般若供養塔（1963）（以上観音寺）

◎石造地藏立像（1783）（常楽院）

◎大般若経供養塔（1828）（金剛院）

◎出羽三山供養塔（1792）（安養寺）

◎庚申塔（1696，1759，1764），西国坂東秩父巡礼供養塔（1775），弘法大師供養塔（1832），光明真言供養塔（1834）（以上慈眼寺）

◎庚申待供養塔（1494），六角石幢（1684），光明真言供養塔（1693），庚申塔（1718），馬頭観音（1721），六十六部廻国供養塔（1736）（以上常光寺）

◎庚申塔（1683），地藏座像（1725），地藏立像（1726），六地藏（1751），名号塔（1776，1816，1820）（以上常福寺）。庚申塔は45基（美女木地区11基，下笹目地区14基，惣右衛門地区1基，新曽地区9基，上戸田地区5基，下戸田地区5基）である。

◎三猿石灯籠（1674），石地藏（1734）六地藏（1764），十六羅漢像（以上妙厳寺）

◎題目塔（1713，1736，1790），橋供養題目塔（1727），敷石供養石灯籠（1788）（以上妙顕寺）

○美女木地区八幡社——手洗石，石鳥居，山神石祠，水神石祠，氷川文字石塔

○下笹目地区笹目神社——石鳥居，石灯籠，手洗石，狛犬，幟立石

○新曽地区氷川社——手洗石，幟立石

○後谷地区氷川社——石鳥居，庚申塔，手洗石3基，狛犬，羽黒山供養塔，芭蕉句碑

○下戸谷地区氷川社——幟立石，手洗石，庚申塔，富士講碑2基

○新曽地区観音寺——六地藏附石幢，石灯籠，聖観音立像，宥尊上人供養の石造地藏菩薩像，駒形庚申塔，笠付き庚申塔，自然文字庚申塔，光明真言塔等多数

○美女木地区慈眼寺——庚申塔3基，西国坂東秩父巡礼供養塔，弘法大師供養塔，光明真言供養塔など

○美女木地区平等寺——弘法大師供養塔，庚申待ち供養塔，六角石幢，光明真言供養塔，庚申塔，六十六部廻国供養塔，普門品読誦供養塔

○下戸田地区常福寺——聖観音立像，庚申塔，地藏座像，地藏立像，六地藏，名号塔3基，等多数

○美女木地区妙厳寺——石灯籠，石地藏，六地藏，十六羅漢像，瑞雲嵩山の墓，木下佐平の筆小塚

○新曽地区妙顕寺——題目塔3基，橋供養塔，敷石供養塔，石灯籠など多数

○下笹目地区園中公園——石灯籠（大山石尊講中造立）

○美女木地区徳祥寺——出羽三山供養塔

○下戸田地区氷川神社——富士講の道標

○美女木地区八幡社——山神の石祠

## 22. 蓮田市教育委員会

◎板石塔婆——馬込地区にある。文字の碑である。高さ約4m，1311年造。

## 23. 鳩ヶ谷市教育委員会および氷川神社

◎記念碑——教育関係6基（地藏院3基，実正寺，桜町小学校，鳩ヶ谷小学校）。行政産業関係3基（氷川



神社，富士見橋脇，鳩ヶ谷小学校）。戦役関係10基（法福寺，八幡社，上新田稲荷社，氷川神社2基，十二所神社2基，五智堂，地藏院2基）。宗教関係22基（常住寺6基，地藏院6基，三和氷川神社，八幡社3基，実正寺，鳩ヶ谷小学校，氷川神社2基，五智堂，御嶽神社）。鳩ヶ谷八景碑6基（千手院参道，変電所内，氷川神社，実正寺門前，法性寺，地藏院）。板石塔婆は宗教関係の記念碑に代表されるだろう。

◎狛犬——4基（氷川神社2基，三和氷川神社，八幡社）

◎御手洗石——14基（地藏院，三和氷川神社，氷川神社，八幡社，神明社，石田神社，上新田稲荷社，笠間稲荷社，御嶽神社，法福寺，本町三丁目自治会事務所，十二所神社）

◎天水桶——2基（氷川神社，八幡社）

◎灯籠——5基（地藏院，氷川神社3基，三和氷川神社）

◎鳥居・標柱——3／10基（氷川神社2基，辻稲荷／実正寺，八幡社，三和氷川神社，源永寺，桜町，法性寺，法福寺，十二所神社，真光寺）

◎国旗掲揚台・幟立——4／6基（雪印牛乳添，地藏院，十二所神社，八幡社／上新田稲荷社，八幡社2基，諏訪神社，石田神社，氷川神社）

◎礎石・石段・玉垣——1／2／2基（熊野神社／法性寺，氷川神社／氷川神社2基）。

◎石垣——8基（氷川神社7基，御嶽神社）

（以上「鳩ヶ谷市の文化財」第3集金石文，昭和52年より）

#### 24. 羽生市教育委員会

◎釈迦阿弥陀種子板石塔婆——西地区にある。毘沙門山古墳の裾に位置する。幅は180cmあり，日本最大幅を持つ板石塔婆である。石質は緑泥片岩である。

#### 25. 飯能市教育委員会

◎種山石——新鉱物

◎厩跡岩窟——秩父重忠が厩跡なりと言う。この辺に地獄岩，胎内巡り，風穴などと呼べる岩穴あり。灰汁石なり。（「飯能市史 資料編Ⅷ 飯能の自然—地形・地質」昭和61年より）

#### 27. 日高市役所および霊巖寺

◎女影ヶ原古戦場碑

◎四本木の板石塔婆

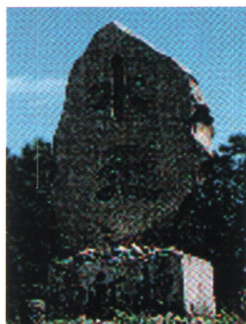
◎水天の碑⇒ ⇒

◎高麗王若光の碑

◎高林謙三の墓（以上「日高ハイキングコースガイド」より）

◎霊巖が露出している。

——霊巖寺⇒ ⇒



#### 29. 本庄市教育委員会

旭地区，仁手地区，藤田地区，今井地区，北泉地区，旧本庄町地区，（合計）の順に表す。

◎庚申塔——142-54-66-9-101-89—（461）

◎二十三夜塔——1-1-6-0-0-2—（10）

◎真言塔——1-0-0-0-0-0—（1）

◎道祖神——9-0-2-0-0-5—（16）

◎二十二夜塔——17-14-16-0-12-6—（65）⇒

◎馬頭観音——12-9-13-7-18-18—（77）

◎巡礼塔——1-0-0-0-2-1—（4）

◎地藏菩薩——1-8-4-5-25-14—（57）



- ◎読誦塔——2-1-1-0-1-0—(5)  
 ◎猿田彦神——1-5-1-1-10-7—(25)  
 ◎湯殿山神——1-0-0-0-0-0—(1)  
 ◎名号塔——1-0-0-0-1-0—(2)  
 ◎大山祇命——1-0-0-0-0-0—(1)  
 ◎水天宫——1-0-0-0-0-0—(1)  
 ◎三神塔——1-0-0-0-0-0—(1)  
 ◎不動明王——1-2-1-0-1-1—(6)  
 ◎稻荷神——0-1-0-0-0-0—(1)  
 ◎諸神——0-1-0-0-0-0—(1)  
 ◎六地藏菩薩——0-0-1-0-0-0—(1)  
 ◎供養塔——0-0-1-0-0-2—(3)  
 ◎薬師如来——0-0-1-0-2-1—(4)  
 ◎八海山神——0-0-0-1-0-0—(1)  
 ◎日本武尊——0-0-0-1-0-0—(1)  
 ◎阿弥陀如来——0-0-0-1-0-0—(1)  
 ◎六地藏——0-0-0-1-2-1—(4)  
 ◎已待塔——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎八幡神——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎祈念塔——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎蠶影神——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎弘法大師——0-0-0-0-1-2—(3)  
 ◎堀供養塔——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎万霊塔——0-0-0-0-0-2—(2)  
 ◎金比羅山神——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎水子地藏——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎聖徳太子——0-0-0-0-0-1—(1) ⇨  
 ◎矜羯羅童子——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎制呬伽童子——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎金剛護童子——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎大黒天——1-0-1-0-2-2—(6)  
 ◎御嶽山神——1-3-0-1-1-1—(7)  
 ◎念仏供養塔／念仏塔——2-0-0-0-0-0—(2)  
 ◎聖観音——1-1-3-1-1-4—(11)  
 ◎弁財天——1-0-0-0-0-2—(3)  
 ◎五神塔——1-2-1-1-0-1—(6)  
 ◎霊神塔——2-3-0-0-0-0—(5)  
 ◎観音(菩薩)——0-1-1-0-0-2—(4)  
 ◎石尊神——0-1-0-0-0-0—(1)  
 ◎勢至菩薩——0-1-0-0-0-0—(1)  
 ◎賽神——0-0-1-0-0-1—(2)  
 ◎百庚申塔——0-0-1-0-0-0—(1)  
 ◎二十字夜塔——0-0-0-6-18-0—(24)  
 ◎三笠山神——0-0-0-1-0-0—(1)  
 ◎木食普寛——0-0-0-1-0-0—(1)  
 ◎頻頭廬——0-0-0-1-0-0—(1)  
 ◎毘沙門天——0-0-0-2-0-1—(3)  
 ◎回国塔——0-0-0-0-4-0—(4)  
 ◎聖観音菩薩——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎仙元神——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎大日如来——0-0-0-0-2-1—(3)  
 ◎堤供養塔——0-0-0-0-1-0—(1)  
 ◎浅間神——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎題目塔——0-0-0-0-0-4—(4)  
 ◎如意輪観音——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎天津地藏——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎普賢菩薩——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎厳島神——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎虚空蔵童子——0-0-0-0-0-1—(1)  
 ◎庚申塔薬師如来——0-0-0-0-0-1—(1)
- (以上「本庄市石造物調査報告書」より)



## 30. 八潮市役所

## 中世

◎板石塔婆——4基(鎌倉時代), 34基(室町時代), 1基(安土桃山時代), 88基(時代不詳)。所在字名, 所有者など詳細に調べられている。

## 近世

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| ◎観音像——17体      | ◎地藏像——44体       |
| ◎不動像——5体       | ◎念仏碑——14基       |
| ◎庚申塔——63基      | ◎諸神——24体        |
| ◎廻国・六十六部碑——11基 | ◎観音霊場巡り——22基    |
| ◎弘法大師遠忌——4基    | ◎名号・題目・真言塔——40基 |
| ◎宝篋印塔——13基     | ◎普請塔——15基       |
| ◎道標——9基        | ◎鳥居——15基        |
| ◎幟石——3基        | ◎石額——8基         |
| ◎手水鉢——25基      | ◎狛犬——8基         |



- ◎灯籠——18基
- ◎記念碑——33基
- ◎歌碑——8基（以上「八潮の金石資料」昭和51年より）

### 32. 和光市役所

- ◎鳥居——新倉氷川神社のもの。花崗岩で出来ている。
- ◎屋敷神——新倉坂下の山田家にある。金比羅大権現，水天宮，貧乏神，八兵衛石（女性の月厄の異称），疫病神の5つの神が祭られている。
- ◎板石塔婆
- ◎五輪塔
- ◎百庚申
- ◎馬頭観音（以上「和光市ふるさと歴史散歩マップ」より）

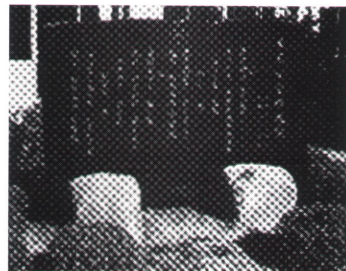


### 33. 蕨市 和楽備神社

- ◎市内に2，3の石がある。

### 34. 入間郡大井町教育委員会

- ◎町役場の表示——花崗岩で出来ている。
  - ◎地蔵院の門柱と石畳——花崗岩で出来ている。
  - ◎鳥居と石畳——亀久保明神社，大井氷川神社ともに花崗岩で出来ている。
  - ◎板石塔婆——徳性寺のもの。緑泥片岩で出来ている。
  - ◎歌碑——東原小学校のもの。斑斕岩で出来ている。
  - ◎堀——亀久保歩道橋付近。大谷石で出来ている。
- （以上「大井町の地質」1985年より）

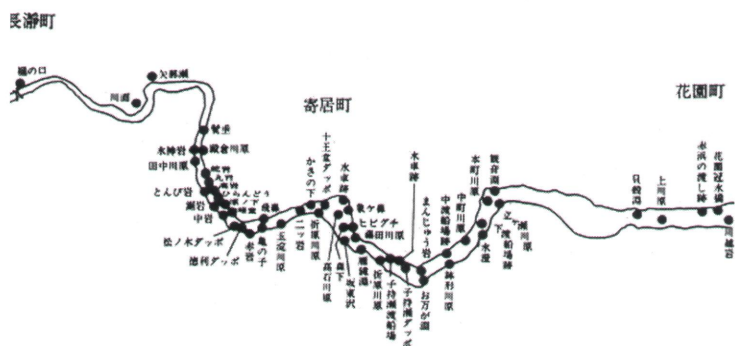


### 38. 大里郡江南町役場

- ◎馬頭観音様——大沢家のもの。熊谷次郎直実が乗ってきた馬が当地で病死した。その供養のために建立したもの。馬頭観音は2基あったが，土地改良のため，1基は真光寺に，もう1基は集会所の傍らに移転した。
- ◎子育て地蔵——真光寺
- ◎疣地蔵——真光寺（以上「江南町史 資料編5，民俗」より）

### 40. 大里郡寄居町教育委員会

- ◎青石——「獅子岩」と言われる。
  - ◎九頭竜様の碑
  - ◎物言い地蔵
- （以上「広報よりい」H11. 7に荒川沿岸のものが示されている。⇒）



### 42. 北足立郡吹上町教育委員会

- ◎石鳥居——明用三島神社のもの。
- ◎石神——荒川土手より町内に移築された。（以上「吹上町史」より）

### 43. 北埼玉郡北川辺町教育委員会

- ◎鈴木弘覚翁碑および書蹟——細間八坂神社境内
- ◎伊勢太廟参拝之碑——細間八坂神社境内

◎十三仏塔——石浮彫り，飯積新屋敷⇨

◎石造六地藏——麦倉中耕地

◎線刻勝軍地藏——麦倉内野

◎愛染明王像塔——小野袋中通り

◎勝軍地藏——小野袋藤畑⇨

◎道祖神——麦倉下耕地

◎万葉遺跡——向古河北通り

◎地藏塚——伊賀袋立崎

◎平井外記之墓——飯積遍照寺（以上「ふるさとの文化財」平成5年より）

◎板石塔婆——飯積地区13基（1272—1385），向古河地区18基（1233—1429），大曾地区34基（1304—1404），その他地区27基（1271—1416）（以上「北川辺の板石塔婆」北川辺町史 史料集（五）昭和55年より）

◎庚申塔——45基（柳生地区4基，柳生新田，久保山，南曾根，小野袋6基，大曾，飯積10基，飯積中新田，麦倉3基，栄東，伊賀袋2基，大塚，柏戸2基，下柏戸，柏戸新田，向古河3基，本郷，高野，細間2基）⇨

◎月待等——66基

◎地藏像——48体

◎勝軍地藏——6体

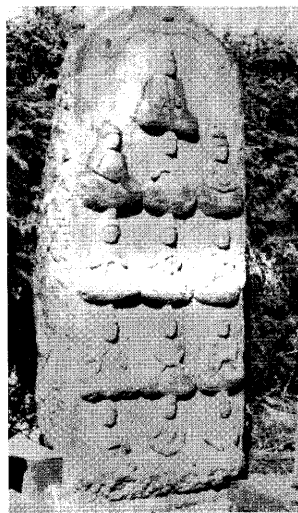
◎馬頭尊——16基

◎道祖神——3基

◎經典供養塔・その他——51基

（以上「北川辺の石仏 北川辺町史 史料集（二）」昭和52年より）

管理者，紀年，主尊，形状，所在地，大きさ，内容など詳細に調査されている。



#### 46. 児玉郡神川町教育委員会

◎板石塔婆——長慶寺にある。高さ152.2cmである。

◎宝篋印塔——町田家

◎高橋周兵衛寿碑

◎木村翁頌徳碑

◎肥土の石棒——広野神社

◎石仏群——御嶽山

#### 48. 児玉郡美里町役場

◎板石塔婆——町内に59基がある。一番古いのは深澤家所蔵の文永9年（1272）で，一番新しいものは勝輪寺の宝徳2年（1450）である。一番大きいものは宗清寺の板碑で，高さ218cm，幅51cm，厚さ5.5cmである。所在地は地図上にプロットされている。

#### 45. 秩父郡大滝村教育委員会

◎鉄砲塚跡

◎里程観音（一里）——十文字峠にある。元治元年に三峯講中等の往来する人々の交通安全を祈願して立てられた観音様。武州から信州まであわせて5体ある。

◎愛宕地藏尊

◎千軒地藏尊

◎山の神／お妻地藏

◎巢場の双体道祖神

51. 秩父郡長瀨町教育委員会

◎青石塔婆（板石塔婆）——野上下郷にある。日本一大きいものである。高さ537cm，巾110cm，厚さ13cmである。別名，「応安の板碑」とも呼ばれている。（長瀨町史「長瀨の自然」平成9年より）

53. 比企郡小川町教育委員会および長福寺

◎六角塔婆——小川地区1基

◎板碑——小川地区3基，大河内地区6基，竹澤地区5基，八和田地区6基

◎五輪塔——小川地区1基，竹澤地区1基，八和田地区1基

◎宝篋印塔——小川地区1基，大河内地区2基

◎供養塔——大河内地区1基，（以上「小川町の歴史」資料編3より）

◎見返り地藏——小川地区龍谷堂

◎駒形青面金剛——大塚小峰

◎丸彫青面金剛——小川地区千日堂前

◎馬頭観音群——下里島根

◎三面六手馬頭観音——大河地区青山矢野口

◎二十二夜塔——腰越赤城

◎百庚申——青山仙元

◎宝篋印塔——竹澤地区木呂子太子堂

◎庚申塔——靱負東武竹澤駅前

◎三十六童子——笠原地区北向不動

◎三面八手馬頭観音——下横田越弥

◎石造物群——中爪地区普光寺前（以上「小川町の石造物—石神・石仏編」平成8年より）

◎奈良坂道しるべ（丁目石）——1丁目毎に標石が建てられたものが残っている。（「氷川の里 上古寺」昭和60年より）

◎奉納大乘妙典日本廻国（1797）——栄広庵

◎大乘妙典日本廻国供養（1803）——石灰岩で出来ている。

◎大乘（妙）典（廻）国供養塔六十六部（1823）——緑泥片岩で出来ている。

◎西国—奉納四国坂東—秩父—諸願成就所（1759）——石灰岩で出来ている。

◎百補陀供養（1808）——安山岩で出来ている。路傍にある。

◎秩父坂東西国日本百観世音札所巡礼記念碑四国八十八ヶ所霊場（1983）——粘板岩で出来ている。

◎奉順拝一月山—湯殿山西国—羽黒坂東—百番塔——点紋緑泥片岩で出来ている。

◎南無阿弥陀仏（1763）——緑泥片岩で出来ている。

◎妙法蓮（華）経——序品窟等について書かれている。

◎六面幢——大聖寺にある。緑泥片岩の下里石を使っている。

◎板石塔婆——大聖寺にある。緑泥片岩を使っている。

◎地藏・釈迦如来等は砂岩，凝灰岩質左岸，安山岩などが利用されている。

56. 比企郡嵐山町教育委員会

◎宝篋印塔——高木山広正寺に高木広正夫妻ら13代の宝篋印塔の墓地がある。

◎身代わり（延命）地藏尊——悪者に追われた村人が，高木山広正寺門前で切りつけられようとしたとき，刃物が真っ二つに折れ，そこに地藏様の首が転がっていたという。

57. 南埼玉郡白岡町教育委員会

◎板石塔婆——33地点，135基（日勝地区15地点49基，篠津地区12地点80基，大山地区5地点6基，——墓

地17基、屋敷内23基、境内88基、その他7基である)

◎宝篋印塔・五輪塔——完形が11基、一部のものが44基である。(宝篋印塔は40基、五輪等が15基である)

◎筆子塚——22地点、67基ある。寺子屋へ、子供達が自分たちの終生の師匠の死に及んで、その供養のために建立された墓塔のこと。(以上「白岡町史 資料6 金石工」昭和61年より)

### Ⅲ部 民話編

#### 5. 桶川市

〔地蔵様と狸〕 昔、坂田の道路に沿って大きな林があり、その中程に地蔵様が立っていました。いつもニコニコしている地蔵様にも困ったことが一つありました。それは、隣村の太郎作が、街へ仕事に行った帰りに、地蔵様の前で必ず小便をする事でした。何とかいい方法は無いものかと思案していると、林に棲んでいる狸が来たので、相談をしました。「オイ、タヌ公、あの太郎作が毎日小便をするので困っているんだよ。臭くて汚いし、何とかならないかね」「そうかね、何時もお前さんのお供え物を頂いているから、ご恩返しにやってみましょう」と言うことになりました。

そうとは知らぬ太郎作、今夜も街からの帰り、お酒を飲んでほろ酔い機嫌で鼻歌を歌いながらやってきました。「地蔵さん、今晚は」と声を掛けると、道の向こうから提灯が見え、ポーッと明るくなり、綺麗な女の人が見えました。この辺りでは見かけたことのない美人が微笑んで太郎作を見つめているではありませんか。「おお、これはこれは、今晚は」と酔った勢いで思わず女の人に抱きつきました。暫くしているうちに、なんだか冷たい感じがするので、「ハテ、変だな」と思い、よく見ると、何と太郎作は地蔵様を抱いているではありませんか。「ヤヤッ、これは何としたことか」と言い、思わず酔いもさめてしまいました。「何時もここで小便をするから、地蔵様の罰が当たったのかも知れない。どうもすみませんでした」地蔵様に頭を下げてションボリ帰っていきました。

林の中から出てきた狸は「地蔵さん、もう大丈夫だよ」「タヌ公、有り難うよ」地蔵様はいつものようにニコニコしておりました。それから後、太郎作は、ここを通るときには、朝晩手を合わせて拝んでいき、小便をしなくなりました。

〔瀧の宮のいわれ〕 その昔、川田谷に薬師如来があり、その傍らに大きな銀杏の木がありあり、大きな池もありました。その池は、清水がわき出て出来たもので、「薬師様のご霊水だ」と村の人に言われていました。

その傍らに湯場が作られ、一時大層賑わったということです。ある時、そこに住んでいた老人が、「大池の水をこのまま湯場にだけ利用したのではもったいない。もっと村人の役に立つような工夫は無いものかなあ」と考えましたが、なかなか良い考えが浮かばず、一年がすぎ、三年が過ぎたころ、「水車を仕掛けたらどうじゃろう」と思い、早速やってみましたが、失敗に終わりました。その後は、誰もこのご霊水を利用しようと考えた人はいなかったそうです。そして、ここでは滝の様に流れているので、瀧の宮と呼ばれるようになったのです。その後、薬師様は、川田谷の中央にある地蔵堂に移されました。

何時の頃からか、その薬師様は、目の病気を治してくれるというので、村人達から崇拜されました。長い年月が過ぎ、その池は埋められ、今は面影もありません。唯、瀧の宮商店街と言う名のみが残っています。

薬師様の入りの馬頭観音だけが、昔のままの姿で立っていて、その近くにチョロチョロと小さな清水が今でも流れています。

〔浮気な地蔵さん〕 昔の桶川のことです。桶川は中山道の宿場として栄え、旅籠が30軒もあり、近くの村から農産物が集まり、いろいろな物売る店が並び、賑やかな街でした。

そのころの旅は、今でいう朝の4時頃には出立するので、早朝から人通りも多く、夜遅くまで遊びに興じるなど、賑やかな街でした。

そのころ、綺麗な若い男の人が夜の街に姿を見せ始めました。この人は、背が高く、気品のある顔かたちで、静かに酒を飲み、美しい声で歌を歌い、時には踊り、楽しく一時を過ごし、静かに帰っていくその姿に、若い女の人たちは憧れていました。

しかし、彼が何処の誰だか分からないため、ある夜、そっと後をつけて行くと、大雲寺の門の中に入るので、若い僧侶が遊んで歩くという噂がたちました。そのため、住職もこのままにしておけず、何人もいる若い修行中の僧を集めて話を聞いたが、誰もそんなことは知らないという。困った住職はある夜、気づかれないように庭に隠れて見張っていると、夜半に近い頃、若い男が寺の庭に入ってきて、いつの間にかフツと姿が消えてしまいました。そして、そこには地藏様が立っていました。この地藏様が若衆姿になって夜な夜な遊び歩いていたのかと思い、翌日住職は、この地藏さんをきつく叱って、これからは外に出られないように鉄の鎧を背中に打ち込んで、鎖で縛ってしまいました。

それからは夜の街を遊び歩くあの若衆の姿は見られなくなったそうです。

〔通り抜けられぬ杉山〕 その昔、川田谷には大きな杉山があちこちに見られました。昼尚暗い杉山の近くには民家もなく、寂しい所でした。

ある日のこと、一人の旅人が山道を通り抜け、隣村へと急いでおりました。暫く行くと、道を塞ぐように置かれた岩のように大きな石にぶつかりました。「おっと、これはいけないなあ」慌ててそれを避けて歩こうとすると、また足元に大きな石があり、避けても避けても大きな石ころが連なる様に転がっていて、前に進めませんでした。

真っ暗な杉山の道を塞いだ石は、何処まで転がってその道を塞いでいるのか見当もつかず、旅人の不安は募るばかりでした。すっかり恐ろしくなった旅人は、元来た道を一目散に駆け戻りました。

村人にその話をすると、「あの杉山にはのお、昔から狸や狐が住んでいて昼間のうちは穴の中で眠り惚けているが、夜になると出てきて人を化かすと昔から言われていてなあ、誰も夜には隣村へ行く人なんぞおらん。余程の物好きもあの杉山だけは行かんなあ」と言う返事でした。

明るる日、旅人に話を聞いた威勢のいい村人の一人が「わしなら、そんな石ころに驚かんよ。きっと隣村まで行き、杉山を通り抜けて見せてやる」と言い、勢いよく出かけました。

日の暮れるのを待って山に入った若者は、石ころぐらいには驚きませんでした。石ころで塞がれるとその道は避けて他の道に曲がり、又石ころに出会うと手前で横道に折れて、一晚中歩き通しましたが、その山を抜けることは出来ませんでした。とうとう歩き疲れて家に帰ってみると、一番鳥が「コケコッコー」と鳴きました。若者は村人達を集めて「どうしたら、杉山を通り抜け隣村まで行けるだろうか」と相談してみました。昼だとなんか通れる道だというのに、どうしたものか夜には通れないとは思議でならない村人達は、みんなで山に入って見ることにしました。日の暮れるのを待った村人達は、それぞれに棒や竹をもって勇んで山に入りました。暫く行くと、やはり話のような大きな石に突き当たりました。一人で山に入った旅人や若者は、恐る恐るその石を避けて歩いたのですが、大勢の村人は手にした棒や竹で力一杯その石を叩きました。

すると、どうでしょう。道を塞いだ大きな石ころは何処へともなく消えてしまいました。次の石もその又次の石も叩くとスーッと消えてしまうのです。「生き物だべ。どうも叩くと頭を縮めてしまうような気がするなあ」「石が口を開いてたまるかね」村人達は口々に言いながら石ころを叩き、とうとう隣村まで行ってしまいました。

明るる日、杉山へ言ってみると杉木立の根本や藪の陰に大きな狸が死んでいるのを見つけました。「やっぱり狸だったのか」と、村人達は何匹もの狸を担いで帰りました。

それからというものは、夜も昼と同様、自由に杉山の道を歩いて隣村へ行けるようになったということです。村人達は、大層喜んで皆でお祝いをしましたが、その後、立派な泉福寺と言うお寺が建てられました。

## 22. 蓮田市

〔お寅子石1〕 馬込の辻谷地区の墓地に大きな供養塔が建っています。昔々、この辺りは武蔵野国から下総や常陸の国とか遠い陸奥の国に行く旅人の通る街道でした。そのころ辻谷には館があって、その主人が旅人や荷物の往来の世話をしていました。ですから辻谷は大層賑わっていました。

ある時、旅のお坊さんが辻谷の館にやってきました。お坊さんは真仏法師と言い、何でも京の都で修行をしたとかで大層な学問があり、人の行いや仏の教えを村人達に話をしてくれました。村人達は心のお坊さんの教えを有り難く聞き、仕事に精を出し、旅人などにも親切にしました。館の主人もお坊さんの教えを有り

難しく思い、お坊さんに頼んでお坊さんの弟子に加えてもらいました。真仏法師は館の主人に唯願という名前を付けてくれました。

真仏法師は仏様の教えを人々に伝えて、辻谷の村を後にして旅に出ていきました。村人達は真仏法師様の教えを守り、よく働きました。そして、旅人にも親切にしました。風の便りに真仏法師様が亡くなったということを知り、館の主人が中心となって真仏法師様の供養塔を建てました。

〔お寅子石2〕 昔、綾瀬川のはとりに開けた辻谷の里に長者が住んでいました。その長者にはそれはそれは美しい娘がおりました。娘の名は寅子と言い、大層な器量好しで心の優しい娘でした。年頃になると近くの村々の若者達からの縁談が引きも切らずありました。長者夫婦は娘の幸せを喜んでいました。そのうち、若者達が、「是非、私のお嫁さんに下さい」、「私を婿に…」と、仕事も手に付かず、毎日の様に長者の家に入れ替わり立ち替わり催促に来るようになりました。長者は寅子のお婿さんを決めねばなりません。長者夫婦は誰を寅子のお婿さんに選んだらよいか考え悩むようになりました。

そうしたある日、若者達の所へ、長者の家から酒宴の招待状が届きました。若者達は今日こそ願いが叶うぞと喜んででむいて行きました。酒宴が始まり、お酒を呑んだり、ご馳走を食べたりして宴も賑やかになった頃、若者達に一皿ずつのなますが配られました。若者達はなますを食べ終わっていいよ婿殿の発表かと思い、口々に「是非、私を婿に」、「是非私の嫁さんに」と申し出ました。すると長者は「皆さんに寅子を差し上げました」と、おかしいことを言いましたが、若者達には何のことも分かりませんでした。若者達がどういうことかを重ねて尋ねますと、長者夫婦は、「ただ今、差し上げたなますは、実は娘の寅子の肉でございます」「私ども、何れの方を寅子の婿殿にと迷いましたが、寅子も何れに参ったらよいか迷っておりました」「先夜、せめてこの身なりとも皆様に等しく分けて上げて下さい。そして、皆さんがそれぞれの仕事に精を出して欲しいと、書き置きを残して自ら合い果ててしまったのです」と、涙ながらに語りました。長者の話聞いて、若者達は大いに悔い、悩み、自分たちのした行動を強く反省しました。そこで、若者達は皆んなで話し合い、寅子の冥福を祈り、この知に供養塔を建てたということです。

〔お寅子石3〕 昔、綾瀬川のはとりに開けた辻谷の里に長者が住んでいました。その長者にはそれはそれは美しい娘がおりました。娘の名は寅子と言い、大層な器量好しで、心の優しい娘でした。年頃になると益々美しくなると、近くの村々の若者達が見初めて、我も我もと長者の家に来ては、「是非、私のお嫁さんに下さい」、「私を婿にして下さい」、「是非、私を…」と、頼みました。

若者達は仕事も手に付かず、長者の家に毎日のようにやって来ては、寅子の様子を窺ったり、長者夫婦に早く返事をして下さいと頼み込むのでした。長者は寅子の婿を決めねばなりません。長者夫婦は誰を婿に選ぶか迷い悩みました。寅子も誰に嫁いだら、一人を選べば、他の者達はがっかりして仕事もしないだろうし、このままお婿さんを決めないでいれば、若者達は仕事はおろか若者同士の争いになるだろうと悩みました。

ある日、毎日のように訪れていた若者達の所に、長者から酒宴の招待状が届きました。若者達は今日こそ婿殿の発表があるかも知れないと喜び勇んで出かけていきました。酒宴が始まり、お酒を呑んだりご馳走を食べたりして賑やかになった頃、なますが配られました。若者達はなますを食べ終わり、長者からの発表を待ちました。

長者は皆に向かって「ただ今、差し上げましたなますは実は寅子の肉でございます」「私ども何れの方を寅子の婿殿にと迷いましたが、寅子もどなたに参ったらよいか迷っておりました前夜、せめてこの身なりとも皆様に差し上げて下し。そして、早く私のことを忘れて、仕事に精を出して欲しいと、書き置きをして自ら合い果ててしまったのです」と、涙ながらに語りました。長者の話聞いて若者達は大いに悔やみ、自分たちのした愚かな行いを反省しました。

若者達は寅子の霊を慰めるため、辻谷の里に供養塔を建て、お坊さんになり朝夕経を上げるため、それぞれが供養塔の見える場所に庵を建てて住みました。その後、村人達は若者の名を寺号として呼び、源悟寺、慶福寺、満蔵寺、正蔵寺、多聞院であると言われている。その他の若者達は、辻谷になます神社を建てて祭りました。暫くして大水で流され丸が崎村に流れ着き、辻谷村に持ち帰り、お祭りをしたが、再三に渡り大水の時に流されては丸が崎村に留まっていたということです。そこで、二つの村で相談することになりました。そこで

二つの村で相談して、なます様はこの村が気に入っているであろうと言うことで、その後なます神社は丸が崎村に祭られたということです。

## 26. 東松山市

〔市の川の室戸岩の謂れ〕 昔、松山地方を治めていた国津神があった。国津神には、室戸姫という可愛い一人の姫がいた。国津神には、世継ぎの男の子が居なかったので、かねてよしみを通じていた隣の豪族の子速玉男命を、室戸姫の婿養子にと親同士が定めて、互いに堅く手を結んでいた。二人は幼心にも互いに慕い合い、仲睦まじい間柄で育った。姫は16、7になると光輝く玉のような美しい姫になり、命は若者になると筋骨たくましい立派な青年になり、弓矢を取っては、この付近に並ぶ者のない巧者となった。

室戸姫と速玉男命とは、明るい華やかな人生が見えていた。その頃、出雲の国から、大国主命の子味すき高彦根尊と言う年若い方が偉いお方が、はるばる東国を鎮めにお出になられた。そして、ある日、味すき高彦根尊は国津神の館を訪ねられて、室戸姫をかいま見られ、姫にいたく心を引かれ、是非妻に欲しいと婚約を申し込まれました。国津神は折角の有り難い思し召しでしたが、姫は既に婚約者があるとお断り申し上げたが、尊は余程強く心を引かれた者として、何度お断り申し上げてもお聞き入れがなく、たつて妻に欲しいときつく所望された。この事を聞かれた命はたとえ尊の仰せといえども、こればかりは仰せに従うわけには参りませぬとお断り申し上げた。

国津神は尊と命の間にあって困り果て、いろいろ考えた末、命は弓の名人であることを思い、弓矢でならよもや尊に後れをとるようなことはあるまいと思い、弓矢の武術競べをされて勝った方に姫を差し上げましようとして申し入れた。二人は各々心に期するところがあるものと見えて、国津神の申し出を快諾された。

いよいよ、運命を決する日が来た。

味すき高彦根尊と速玉男命は、夜の明けるのを待たず市の川に来て、尊は東の岸に、命は西の岸に矢を背負い、弓を持って日の出を合図に勝負を決することになった。市の川の真ん中にはこの勝負に一身の運命を賭けた室戸姫が、純白の衣を纏い、ただ一人小舟の中にじっと目を閉じ、何事かを祈るようにうずくまっていた。やがて、夜が明け、時こそ来たかと、おもむろに背の大矢を抜き取り、弓を取り直して相手に後れをとるまじと深く心に念じ、静かに満身の力と心を一点に集め弓をキリキリと引き絞った。

東の空に太陽が正に顔を出さんとしたとき、室戸姫がすっと立ち上がった。と思うとさっと身を踊らせて、市の川に身を投げてしまわれた。二人は、思わずあっと叫びざま弓矢を大地に投げ捨てて、東と西の岸から同時に市の川へ飛び込み、室戸姫を救わんとして姫の姿を探し求めたが、不思議なことに沈んだばかりの姫の姿は遂に何処にも見あたらなかった。岸に上がった二人はただ茫然とするばかりであった。姫は自らの死をもって二人の争いをやめさせ、二人の心を結びあわせることを悟った二人は以後、互いに仲睦まじく、力を合わせてこの地方を治めることを堅く誓い合った。

川底に沈んだ姫の亡骸はそのまま川底の岩と化し、再びこの世に現れることはなかった。今も市の川の川底深く岩と化した室戸姫は、ひっそりと横たわっている。その大きな岩を里人は室戸岩と呼んでいる。

味すき高彦根尊は吉見町田甲の高負彦根神社の祭神であり、速玉男命は東松山市東平の熊野神社の祭神である。

〔利仁神社の枕石〕 甲「將軍様の話ですか、さあ、俺ああんまりよく知らねえだよ。名めえかね。何でも藤原の利仁ちゅうのが名めえだそうだよ。この辺をよくお治め下さったので神様に祠り、下野本の鎮守様になったのしょうよ」

乙「下野本で陸稲を作らなかったわけかね。年寄りに聞いた話じゃあ、何でも戦の時、將軍様が陸稲畑でおつ転んで、陸稲の葉っぱの先でどっちの目か知らねえが目を突いて片目潰れちゃったというので、偉い將軍様の目、つぶして申し訳ねえと言うので、申し訳に孫子の代いつまでも陸稲は作らなくなったちゅうはなしですよ」

丙「下野本で陸稲をつくらねえわけですか。それは將軍様が賊を成敗なさったとき陸稲畑で陸稲につまずいておつ転んで、陸稲の穂先で眼を突いて片目が潰れてしまった。その將軍様のおかげで悪い賊を退治していただきました。そのご恩を長く子々孫々にまで忘れないようにと、陸稲を下野本では作らなくなったちゅう話ですよ」



丁「子供の麻疹がはやると、将軍様のお庭の石をお借りする話ですか。さあそのわけは知りませんが、俺が子供の頃には春先、麻疹がはやり出すと、五里も六里も離れたところからも、親たちは子供が麻疹にかからないよう、またはかかっても軽く済みますようにと、子供を連れてお参りに来てお庭の小石を一つ押し頂いて帰り、小袋に入れて子供の帯に付け腰に吊してやったもんでさあ。すると不思議に麻疹にかからなかったり、かかっても軽く済んだちゅうので、綺麗な小石を川から拾って来てお借りしたのと二つにして小袋に入れてお礼参りに来たもんで、昔は将軍様の狐格子に、色とりどりの小石を入れた小袋が一杯下がっていたもんでしたよ」

戊「将軍様のお枕石ですか、とんでもねえ、その枕石を見ると罰が当たり目が潰れるというので、俺だけじゃねえ村の者で見た者あ一人もあんめえ。でも、ひょっとしたら神主様あこっそり見ているかも知んねえよ」

己「お枕石ねえ。もしかしたら将軍様があんべえ悪い時、熱が出て、昔あ水枕や氷枕が無かったから、そのお枕石を頭あ冷やすのに使ったもんかも知んねえ。それで子供が麻疹で熱を出すので、そのまじないにお枕石の代わりにお庭の石をお借りしたもんかも知んねえ。神主さんならそのわけを知っているかも知んねえから聞いておいてやんべえ」

### 30. 八潮市

{若狭の八百比丘尼} 昔、若狭国小浜に八百比丘尼が住んでいたそう。昔は、武蔵国は峰の八幡様より下総国国府台までが海で、この辺り一帯は泥水であったという。

上総国から行商で、この泥水の所へ魚を売りに来ていたじい様がいた。ある日、この魚売りのじい様が、「長い間世話になったので、皆様を上総の私の家へ招待し、ご馳走をしたい」との申し出をしたそう。そこで、「一度行ってみんべえ」と言うことから、名主と村人五、六人が出かけたそう。じい様に教えられた家に着くと、じい様の家は網元で、大層な暮らしをしている長者であった。何でもじい様の小使い稼ぎに行商をしていたとのこと。村人達は、たまげてしまった。

「遠いところからよく来んなさった」「珍しいご馳走をするから、まあ、上がれ」と言うことで、奥座敷に通された。村人達は、網元のことから大層な料理が出るだろうと、内心期待していたが、なかなか料理が出てこない。一人が、厠の帰りに料理場を覗くと、まな板の上に人の首が乗っている。戻ってその話をすると、それを聞いた村人達は、「人魚を食わされては、さあ大変」と大騒ぎになった。そこへ、「珍しい魚を食べさせようと思い、手間がかかりました」と、刺身や酒が出された。だが、誰も刺身には手を出さず、酒などをかっくらったそう。長者の家では旅の疲れで手がでないのであろうと、刺身を土産に持たせてくれた。お礼を言って、帰りの船の中で村人達は、人魚の刺身を海に投げ捨てたが、名主のじい様だけは酒をせっせと飲んで、懐に入れっぱなしで、家に帰ったそう。名主のじい様の孫娘二人が、「おみやげちょうだい」と言って、じい様の懐の刺身を取り出し、くっちゃまったそう。この事が、誰とも言うことなく村人の噂になり、その娘は器量が良くても、人魚を食った娘と言うことから嫁にいけない、年をとっても娘のままであったそう。とうとう尼さんになり、若狭の国に流れ着き、何でも若狭で八百年も長生きをしたそう。中馬場の山王塚に「比丘尼」石があるが、八百比丘尼を供養したものだそう。

{土手守り様} 「上手の土手が切れそうだ」「鋤や鍬、もっこを持って氷川様さへ最寄れとの名主様からの言いづぎだ」名主様からのお呼びということで、二町目の村人らが駆けつけると、古利根川が増水し、今にも土手が切れる寸前であった。名主様の差配で、諸処に水防に当たった村人らは、「どうせ上手の土手は切れ所だ」「土俵さあ積んでも無駄じゃあねーか」と言う気が先立ち、水防に身が入らなかった。案の定、土手が切れて二町目村は水浸しとなった。

今までに、どんな立派な土手を作っても、二町目氷川様の所だけは切れてしまう。二町目の村人達は一生懸命に立派な土手を作り、氷川様へ堤が切れないように神頼みをしてきた。然し、度々土手が切れてしまうので、土手の修復に身が入らなかった。

築堤に身が入らない様子を見た普門院の浄西様は二度と上手の土手が切れないように願を掛けて行に入った。そのことを知った村人らは朝な夕なに普門院へ参詣し、賽銭を供えた。その浄財で浄西様は、高さ六尺ほどの石仏を作った。そして、村人らに、「この石仏に、二度と土手が切れないように開眼した」「石仏を切れ所の土手上に建てるから、土手を直して欲しい」とお話をしなされた。

村人達は、石仏が流されないように、一生懸命土手を直したんだと。それから二度と土手が切れなくなり、村人達は石仏を「土手守り様」と呼ぶようになったとき。

#### 46. 児玉郡神川町

{子宝薬師} 昔々、渡瀬村に作兵衛とおもんと言う若夫婦が毎日を楽しく過ごしていた。然し、子宝に恵まれないことだけが二人にとって不足でした。作兵衛は家の周りの野良仕事をしたり、御岳山に登って、薪を取ってきてこれを売り、日々の暮らしをたてていた。

ある日作兵衛は、薪を取って束ねて背負い、山を下りてきた。山の麓で一休みしたが、休んでいるうちにいつの間にか眠ってしまった。すると何処からともなく女神様が現れて、「この山にさねの形をした岩があるから探してみなさい。そして、それに向かって子宝に恵まれるよう毎日お参りを続けなさい」と言って消えてしまった。作兵衛が目覚めた時にはすっかり日も暮れていた。急いで家に帰り、おもんに話をしたところ、おもんも大変乗り気になってその岩を二人で探すことにした。そして、探し当てた岩に毎日お参りを欠かさなかった。やがて、女神様の言われたように夫婦に子宝が恵まれた。

それからというもの、この話が近在の村々に伝わり、ここを訪れる人が増え、そしてこの岩を誰が名付けたか「さね薬師」と言うようになったが、現在は「子宝薬師」としてゴルフ場入り口に移されている。（「神川町史」1989より）

#### 47. 児玉郡児玉町

{満五と麻香} 知々夫国造の一族が児玉、賀美、那珂の各郡司として配備されてからもめ事が多くなった。592年のこと、本庄村の予言者の言葉によって三郡の郡司は金鑽山の鏡岩に集まった。そこで三郡の青年達を集め美男美女各一名を選び、選ばれた男は石棒を作り、女は玉を造って明朗な三郡社会の幸福をはかることとなった。14歳から18歳の青年達は男78人、女85人、うち6人欠席、那珂郡弘紀村の湖畔に集まり、男は賀美郡毘沙吐村首長の長男満五（17歳）と、女は那珂郡下児玉村首長白良の長女麻香（15歳）が選ばれた。満五は眉目秀麗、筋骨たくましい明朗な青年であり、麻香は愛らしい純潔そのものの様な少女でふさふさした黒髪を大胆に大きく結び上げ、まだ見かけたことも無い高髪とか麻香髪と言われる髪型であった。満五は秩父原石から1m75cmの石棒を、麻香は目映い五個の曲玉を一心不乱に造り上げた。そして石棒は男神のご神体として賀美郡石神の里に石神社として祠られ、女神のご神体として五つの曲玉は那珂郡弘紀の里の甕蓮神社に祠られた。

やがて、郡司は二人を夫婦にしようとした。そして満五と麻香も愛し合う間柄となっていた。然し、胸刺国造の次男坊が是が非でも麻香を嫁にしたいと秩父国造に仲人を頼んできた。麻香の父白良は長いものに巻かれるんだと考え、麻香を説得したが聞き入れられなかった。

麻香は満五を呼び寄せ、一夜湖水に船を浮かべて話あかした。次の日の夜半、麻香は満五の清潔な心と美しい容姿を心に抱きながら湖底に沈んで行った。満五は急いで湖畔に来て三日三晩泣き明かした。それ以来、この池をマカ池と呼んでいる。その頃、八幡山村に住む埴輪師長賀は満五から死んだ麻香の埴輪を作ってほしいと依頼された。ふくよかな頬、優しい眼差し、可愛らしいおちょぼ口と麻香髪の埴輪ができあがった。満五は湖畔にこの埴輪をたてて、足よりも軽く、目は輝いて嬉しさが止まらない様子であった。草木の繊維で作った着物は荒目で空色をしている。トルコ帽の様な奇妙な帽子をかむっている。紐でくくった腰には、鉈に似たものをしっかり差し込んでいた。麻香の生家のある下児玉を過ぎて毘沙吐村に帰った。毘沙吐村は西に神流川、北に烏川（利根川）が流れ川船による交易が行われて活発な生活が営まれていた。

満五は翌日の朝、懐かしい故郷の名所だった神流川と烏川の合流点にある底なしの淵に身を投じた。満五は盛装した麻香の姿と彼女の作った五つの曲玉の画を13枚も抱いていた。児玉郡司はこの悲しい清らかな二人の恋いに心を痛めた。そして、麻香塚は下児玉の地に作り、麻香の埴輪をこの地に移した。満五の墓も知々夫国造から賀美の豪族了賀に言いつけて賀美全住民で毘沙土に築き、藤岡郷の埴輪師によって満五の埴輪が造られて墳墓にたてられた。

時は流れて、昭和28年10月28日麻香塚から麻香の埴輪頭部が出土した。続いて昭和33年1月21日満五の古墳から満五の頭部埴輪が発見された。この二つの埴輪は何時も並んで村に保管されている。

## 18., 49., 50., 51., 52. 秩父市および秩父郡

〔力石〕 妙見宮の境内の片隅で風雨にさらされている楕円形の石があります。それが「力石」と呼ばれている、昔からある石です。

昔々、お寺の仁王様は寺の門番をしていましたが、一日中門に閉じこもり続けているので、大きな体をもて悩んでいました。そこで、毎晩毎晩人目を避けながら妙見様の境内にでは力石を手で捧げ上げること百余回。腹の上に乗せて上下するなど本気で体力増進に励んで汗を流しておりました。ところで、長く続けているうちに、境内が広いのでこの力石を思うまま蹴ったり、投げたりまたは背に担いだりして境内を走り回りました。こうして仁王様と力石は仲良くなったそうです。そうしては、夜の明けぬうちに仁王様はいつものように門番に戻るのです。

ところが……。毎夜毎夜夜中に妙見様の境内の方で、地響きがすると言う噂が出始めたので、氏子の人々が、早朝恐る恐る妙見様の境内に行ってみましたが、何の変化もありませんでした。力石も前からあった場所にちゃんとあるので、氏子の人々も風の音か何かかんち違いをしたのだろうとわが家に戻っていきました。然し、氏子の家に何事か起きては大変と、老人はじめ多くの人々が妙見様をお参りしたそうです。

昔は、お祭りや何かの集会で人々が集まる度に力石で力試しをしたそうです。年毎に奈倉のみょうけん様には力石があるそうだと近隣の剛力が我も我もと集まり、力比べをしたそうですが、この力石を両手で支え上げる人はいなかったそうです。然し、腹まで抱えて歩いた人は居たそうです。

〔信濃石〕 秩父に春が来ると、毎年信濃から馬方さんが荷物を積んでやってきます。

今年も年老いた馬方さんが、馬を牽いてのんびりと歩いていました。先ほどから、その様子を見ていた両親のない兄妹が、明るい表情で話していました。「兄ちゃん、春はやっぱり嬉しいネ…」ところが、馬方さんは八剣神社の鳥居の前まで来ると急にしゃがみ込んで苦しみ出しました。驚いた二人は馬方さんのところに駆け寄り、「お爺ちゃんどうしたんですか」「どこか苦しいの。お爺ちゃん」兄妹は馬方さんを自分たちの家につれて帰り、薬を煎じて飲ませたり、あれやこれやと夢中で介抱しました。然し、馬方さんはぐったりとし、眠り続けました。三日目になってやっと気づきました。二人はホッと胸を撫で下ろしました。

馬方さんは大好きな熱いお茶をうまそうに飲みながら、今までのことを聞いて、二人の親切に涙を流しました。やがて、馬方さんは呟くように「婆さんが、今年は無理じゃから行くなと言ったが、やっぱり止めときゃ良かった…。わしはもう婆さんの所には帰れんかも知れんなあ…」と言いました。二人は胸が詰まって涙が溢れ来ました。「わしが死んだら、馬はあんた達に上げるから可愛がっておくれ…」「それと、荷物の釣り合いを取るために、石が二つ、荷倉にあるから、それも記念に取っておいておくれ…」馬方さんは又お茶を飲むと、考え込むように目を綴じて呟きました。「婆さんは一人ぼっちになったら、どうして暮らすんじやろうか…。帰ってやりたいのお…」そう言って間もなく、フーッと大きな息を吐きながら突っ伏すと、持っていた空の湯飲みが転がり落ち、それきり目を閉じたまま動かなくなっていました。「お爺ちゃ～ん!!」「お爺ちゃ～ん!!」二人は大声で叫びながら、馬方さんにしがみついて激しく体を揺さぶりました。けれども馬方さんは二度と目を覚ますことはありませんでした。兄妹の泣く声だけが薄暗くなった部屋から、高く低く何時までも聞こえていました。

二人は気の毒な馬方さんの葬式を済ませました。幾日か経って、記念に貰った二つの石をお爺さんが倒れた八剣神社の鳥居の側に置いて冥福を祈りました。

ところが、その時、信じられないことが起こりました。何と！二つの石は日増しに大きくなり出して、とうとう岩の様な大石になったのです。忽ち村中が大騒ぎになりました。そんなある夜、兄妹はそっとその石の側に立って、死んだ馬方さんのことを考えていました。すると、石の中からかすかにお湯の煮立つ音が聞こえてきました。思わずハッと息を呑んだ二人の耳に今度は紛れもないあの馬方さんがお婆さんと話している声が聞こえてくるのです。

二人は耳を疑りました。然し、声は確かに聞こえます。あまりの驚きに口もきけず、互いに顔を見つめ合うばかりでした。暫くして、妹が声を潜めて「兄ちゃん、馬方さんはお婆さんの所に帰ったんだネ」兄は深く頷いて「お婆さんのことが気がかりだったんだよ…」

この噂も大石話に重なって忽ち広まり、八剣神社はその石を見に来る人たちで毎日賑わったそうです。

その後、この石のことを村の人たちは信濃石と呼ぶようになり、いまも八剣神社の鳥居の両側にデンと座って居るのです。

〔子持ち石〕 昔、秩父に、大層仲の良い夫婦がおったそう。二人は何一つ不自由なく、毎日を楽しく暮らしておった。だが、だだ一つの不満は、この夫婦の間には子供がなかったことだったそう。近所の親子が仲良く遊び、春には餅草取り、夏には魚釣り、秋には柿落とし、冬には薪を拾う姿は、この夫婦にとって、大層羨ましいことだったとさ。「何とかして子供が欲しい」これが、夫婦の口癖であったそう。然し子供はどうしても生まれず、二人はただ、溜息を吐くばかりであったと。

ある夜、夫婦はいつものように「子供が欲しい。子供が欲しい」と語り合いながら眠りについたそう。すると、不思議なことに、夢枕に観音様が現れて、「秩父札所三番常泉寺の子持ち石を信心すれば、立派な子供が産まれるであろう」と教えて下さったと。

それからというもの、夫婦は毎朝毎晩、常泉寺へ行って子持ち石を拝み、「どうか、一日も早く子供が産まれますように」と祈ったそう。やがて、観音様のお告げ通り、夫婦には、丈夫な男の子が授けられたと。夫婦の喜びは、天にも昇るほどだったそう。

観音様の有り難いお心に少しでも報いようと、夫婦は常泉寺の子持ち石に、前掛けと袈裟を納めたと。この夫婦の話は、子供のいない人々の間にだんだんと広まり、常泉寺へお参りして子持ち石を拝む人がどんどん増えて行ったそう。こうして、あきらめていた子供が産まれた人は、歳とともに増えていき、子持ち石の周りには、前掛けや袈裟で一杯になってしまったと。

子供の寝ている姿をした子持ち石荷は、いまもお参りする人が絶えないそう。

（以上「秩父の民話と伝説」より）

### 53. 比企郡小川町

〔四つ山の三つご石〕 昔々のお話です。四つ山の麓に、三つ子の兄弟がおったと。そんで、何をすんにも三人は一緒だったと。

ある天気の良い日、太郎兵衛が、四つ山の中腹にある八畳じきほどもある石をめつけて、弟たちに言ったとさ。「なあ、四太郎、太郎吉、これからこの石を持ち上げて力試しをすべえ」そして四太郎が言ったと。「うん、おらやる」太郎吉も「おらもやる」

そこで三人は、八畳敷きもある石を持ち上げてしまったとさ。これでもまだやめねえで、四太郎が言ったと。「こんだあ石を持って、山の周りを回るべえ」するとあとの二人も「うん、そうすべえ」と言ったと。そんで石を担いで、四つ山の周りを走り出したんだと。何回か回ったところで、太郎吉が、「おらあもうだんめだ〜」と言ったと。太郎吉が手を離れた瞬間、石が三つにぶつかってしまったと。これを見て四太郎が言ったと。「この石はおら達と同じだなあ」三人とも「三つ子石ダ」と言ったんだと。こうして三つ子石はできたんだとさ。いまでも三つ子石は四津山に残っています。

〔烏の穴の伝説〕 駱駝の瘤のような官の倉、石尊山が、霧に煙って見えないと、「ほれ、もうすぐ雨が降ってくるぞ」そう地元の人は言いました。

その官の倉のふもとに、昔「烏の穴」という鍾乳洞がありました。人一人立ってやっと入れるくらいの穴で、そこからすぐ深い井戸になっていました。試しに小石を放り込んでも、ただ、カラカラ…と音が吸い込まれそうな不気味な穴でした。「さて、一体この底なし井戸のような穴は、何処まで続いているか一つ試してみよう」

ある時、ひとびとが集まって相談の結果、一羽の鶏を井戸に投げ込んでみました。そして、「さあ、鶏は何処へでるだろうか」人々は心当たりの方角へ飛び出しました。

哀れな鶏は、一体何処にでたと思いますか。ここからずっと西、折原のかまん洞にでたと思いますか。どうしてどうして、更に西の鉢形の城の下を抜け、流れも荒い荒川も何のその、象ヶ鼻と言うところに、「ケッコ、コケッコ、もうケッコウ」と飛び出したということです。

この穴も、その後、山崩れや鉄砲水のため、すっかり埋もれてしまったそうです。

（以上「小川町の民話と伝説」より）

## 56. 比企郡嵐山町

〔水切り石〕 太平山の東のふもとに、千手観音様を祠った千手院と言うお寺がある。大字が千手堂と言われる所だから、千手院は大きなお寺だったようだ。本堂の他に、いろいろのお堂があり、比丘尼堂と言って女のお坊さんの堂もあったという。

ある時、比丘尼堂が火事になった。一人の比丘尼がどうしたことかその火事現場から逃げ出して、山の中を逃げ走り、槻川の所まで来て、川の中へ落ちてしまった。寒い冬の川なので、かわいそうに比丘尼は死んでしまった。

夏の日、元気な子供達が、槻川で水浴びをしていた。綺麗に澄んだ川水は、魚の泳ぐのもよく見える。川端の石の穴へ魚を追い込んで捕まえたり、水潜りの競争をしたりして遊んでいた。そのうち、一人の子が、「あそこに光るものがあるよ」と皆に告げた。水潜りの上手な子が、「ようし、俺が取ってくるよ」と潜っていった。皆が目を輝かせて待っていた。そのうちボカッと頭が見えた。「あったぞ」と大きな声がした。皆が待っているところへ、抱え上げてきたのは、金ピカの観音様だった。「名主さんに見せた方がいいぞ」「そうだ、そうだ」と皆で観音様を抱え上げて名主様の家に行った。

名主様は、庭石の綺麗な一つにその観音様を乗せた。「これは千手院の観音様だ。水が乾いたら早速お届けしよう」と言った。その日のうちに名主様は千手院に観音様をお送りして本堂にお祭りして貰った。名主様の家の庭石は「水切り石」と名を付け大事にお守りした。観音様の上がったところは観音淵と名が付けられた。  
(「嵐山町史」昭和58年より)

## 考 察

多くの市町村役場、教育委員会そして神社仏閣のご協力を得てまとめたが、単に返送されてきた資料を写すだけに留まってしまい、解釈をせずに報告をすることになったことに、能力のなさを痛感している。近い将来、現場に行き、自らの目で言い伝えられている石(岩石)を見たいと考えている。

言い伝えや伝説的な石(岩石)の存在は、それにふさわしい岩石が露出していることが必要条件として上げられる。又、岩石が露出していないような所では、後の人々に何かを伝えようとすれば、人工的に造るよりし方がないであろう。従って、本調査を企画した段階から第Ⅰ部のような岩石は岩石露出地域、即ち、関東山地と呼ばれる埼玉県西部地域には多く、田畑を主とする関東平野部の埼玉県北部、東部、南部地域には少ないであろうことは分かっていた。果たして、その通りであった。この場合、多くは、河川や沢などの周辺に存在している。当然のこととして、浸食の行われる様な地域に存在する。埼玉県の場合、チャート、砂岩、石灰岩等の中古生層や三波川変成岩類、御荷鉾変成岩類等が言い伝えられている石(岩石)の中心であろうと思われる。

又、日本武尊や源頼朝等、全国的な知名度のある人の「腰掛け石」は興味深いことであるが、私はここでは学問的な解釈、即ち、地質鉱物学的な立場や歴史学的立場で議論するつもりはない。むしろ、何故その様なことが言い伝えられているのか、当時の人々のそれに対する考え方や見方を推察してみたいと感じている。即ち、自然に横たわる石(岩石)を、いろいろな物語の主役として創作し、それを後世の人々に伝えるにはそれなりの話の構成や真実性を持たせなければならないと思う。誰がその話の道筋を考えたかは残っていない。それが言い伝えなのであろう。その時代の人々の貧しくともおおらかな生活が一つ一つの石にかたり伝えられているように思える。一方、「力石」などは当時の家々がどこかの氏子でありどこかの檀家であったであろうことから考えれば農閑期のお祭りなどに成年男子が競って力試しをすることは容易に考えられることであり、久伊豆神社(岩槻市)を始め幾つかの神社のアドバイスにもあったように、力石は市内の各神社に存在すると言われるように、恐らく祭りを主催する神社には力石がかなりの数奉納されていたのではないかと考えられる。秩父盆地の牛首峠層の基底礫岩中には力石にするには格好の花崗岩質岩石の礫岩がある。今日でも、何れかの神社で大きなお供えを持ってどのくらい歩いたかを競う力試しがあるようだ。そして、残念に思うのは力石は力試しのためだけの石であったのか。例えば、それらを重軽石として占いには使われなかったのであろうかと言うことである。今回、何れの回答にも重軽石の表現は無かった。

これらに対し、第Ⅱ部でのいわゆる石造物に関しては正に、武士と庶民の文化の違いを象徴するようにそ



これらの分布、時代、地域などが明確に語ってくれていると思う。板石塔婆は主に武士階級が造立し、寺院や墓地に建てられているが、庚申塔は庶民の結衆により路傍などに造立されている。板石塔婆は秩父地方特に長瀬周辺で産出した三波川変成岩類の緑泥片岩を利用している。名前のように片岩は板状に加工しやすく、それほど硬い石でもないで、細工もできたのであろう。石造物に使用された岩石の主なものとは花崗岩類である。埼玉県にも、秩父鉾山周辺に花崗閃緑岩が分布するが、むしろ、茨城の筑波周辺（稲田御影）、群馬の澤入御影、山梨の塩山御影等が利用されたのではないかと思われる。

一方、石仏等はむしろ奈良・平安時代に盛んに彫られたが、平安末期から鎌倉時代初期までは何故か石仏などは見あたらない。即ち、石細工の空白時代といえるだろう。これは、奈良時代に、渡来人達やその子孫が良い鉄をもってきたためとその技術があったからこそと考えられる。恐らく、良い鉄が日本でえられなくなり、渡来人の子孫達も日本の社会に同化され、その技術などが伝わらなかったものであろう。それが、末法思想とともに、武家社会の無情観とにより、自らを後世に残すことや供養を板石塔婆等に託したのと考えられる。そして、このような社会的要求に対してタタラ法によるよりよい鉄の生産と日本人による技術の向上などにより、板石塔婆等が各地に造立されていったのであろう。そして、それらの石の運搬は、ここ埼玉においては、恐らく陸路を取るよりも、荒川や利根川等の水路を使用したのではないかと考えられる。八潮市などでは正に、その多くが川に沿った形で板石塔婆や庚申塔が分布しているのである。

また、埼玉県の中小高等学校の児童・生徒に自らの生活している基盤に数多くの言い伝えられている石（岩石）が存在することを認識してもらい、地学関係、特に、岩石関係の授業の導入に、このように人々に役に立っている石（岩石）を身近に感じてもらえるような話をするとは、あまり岩石などに興味を持っていない児童・生徒により親近感を持ってもらうことが岩石ひいては地学を理解してもらうための重要なことと考える。議論のオーダーを変えれば、限りなく個人的なものにまで発展する。その代表的なものは墓石であろう。これはその家代々の言い伝えがあるのである。

このように、言い伝えられている石（岩石）は、利用法によっては教材と考えてよい。となれば、埼玉県だけでなく、全国の中小高の理科や地学担当の先生方が、学校の地域において言い伝えられている岩石や石を調査し、授業に生かせば、全国規模のすばらしい教材になるものと期待を持っている。

#### 引用文献

- 朝霞市史編纂委員会（1900）：朝霞市史 民族編  
朝霞市教育委員会（ ）：朝霞の石造物Ⅰ，朝霞の石造物Ⅲ  
浦和市史編纂委員会（1987）：浦和市史 通史編Ⅰ，浦和市  
浦和市教育委員会（1996）：石の文化財―浦和の石造物―，浦和市教育委員会  
桶川町史編纂委員会（1955）：桶川町史  
桶川市（1990）：桶川市史 第九巻，桶川市教育委員会  
桶川市教育委員会（1986）：桶川 文化財を訪ねて，桶川市教育委員会  
桶川市教育委員会（1989）：桶川 続 文化財を訪ねて，桶川市教育委員会  
加須市教育委員会（1992）：加須市の文化財，加須市教育委員会  
川口市教育委員会（ ）：川口の文化財  
日下部朝一郎（1963）：新編熊谷風土記稿  
坂戸市教育委員会（1983）：坂戸市史 民俗資料編Ⅱ 石造遺物  
坂戸市教育委員会（1995）：坂戸市ふるさと歴史散歩マップ，坂戸市教育委員会  
草加市史編纂委員会（ ）：草加市史 民族編  
秩父市教育委員会（1990）：秩父の文化財  
秩父市教育委員会（1962）：秩父の伝説と方言  
鶴ヶ島市教育委員会（1998）：鶴ヶ島の石造物，鶴ヶ島市教育委員会  
戸田市（1986）：戸田市史 通史編 上，戸田市  
鳩ヶ谷市教育委員会（1977）：鳩ヶ谷市の文化財 第3集金石文

羽生市史編纂委員会 (1971): 羽生市史 上巻

飯能市役所 ( ): 広報奥武蔵 247, 209

飯能市史編集委員会 (1986): 飯能市史 飯能の自然—地形・地質, 飯能市

飯能市教育委員会 (1995): はんのうし遺跡分布地図, 飯能市教育委員会

東松山市役所 (1999): 東松山市 便利マップ, 東松山市

日高市史編纂委員会 ( ): 日高市史 自然史編

日高市役所: ひだかの四季

日高市・日高市観光協会: ひだか, 日高市・日高市観光協会

本庄市教育委員会 ( ): 本庄市文化財調査報告 第二集 本庄市石造物調査報告書, 本庄市教育委員会

八潮市教育委員会 (1976): 八潮の金石資料, 八潮市教育委員会

: 八潮のむかしばなし

和光市教育委員会 (1998): 和光市ふるさと歴史散歩マップ, 和光市教育委員会

大井町史編纂委員会 (1985): 大井町の地質, 大井町教育委員会

江南町役場 (1996): 江南町史 資料編 5, 民俗

寄居町役場 (1999): 広報よりい

吹上町史編纂委員会 ( ): 吹上町史

————— ( ): 中山道分間延絵図 第二巻 解説編

皆野町誌編集委員会 (1982): 皆野町誌 自然編 I 地質, 皆野町

北川辺町教育委員会 (1993): ふるさとの文化財, 北川辺町教育委員会

北川辺町史編纂委員会 (1977): 北川辺町史 史料集 (二) 北川辺の石仏, 北川辺町教育委員会

北川辺町史編纂委員会 (1980): 北川辺町史 史料集 (五) 北川辺の板石塔婆, 北川辺町教育委員会

長瀨町史編纂委員会 (1997): 長瀨の自然, 長瀨町

神川町町役場 (1989): 神川町誌

神川町教育委員会: 神川町の文化財, 神川町教育委員会

三峯神社 ( ): 三峯神社誌 民族編第1輯

小川町役場 (1997): 小川町の歴史 資料集 3

小川町教育委員会 (1996): 小川町の石造物—石神・石仏編

氷川の里編纂委員会 (1985): 氷川の里 上古寺

白岡町史編纂委員会 (1986): 白岡町史 資料 6 金石 I

都幾川村史編纂委員会 (1999): 都幾川村史 地理編

本間久英 (1995): 民俗学的文献中の石に関する資料, 東京学芸大学紀要 第4部門 数学・自然科学 第47集 155—175.